

高野先生とゴマジロオニグモ 池田 博明

日本野鳥の会理事で、東京クモ談話会および東亜クモ学会会員であった高野伸二氏が昨秋、ガンのため他界された。まだお若く、充実した仕事をされていたのに残念である。僕は3年ほど前に、東京クモ談話会の伊豆合宿で初めてお会いしたのだが、鳥やクモだけでなく、生き物に興味を持ちつづけられる氏を知る機会があって、幸運であった。そのときのことを思い出して書いた文を、談話会の追悼文集より転載する。

“それはゴマジロオニグモの網だった。1983年8月29日、宮崎県の上祝川（かみほうり）でのことである。壹島晃、新海栄一、高野伸二の一行に同行させていただいた僕もカメラ片手にクモの写真を撮っていたのである。私たちを案内して下さったのは、築地高男、石野田辰夫、松山紘一の九州のクモ研究のベテランの方々だった。ゴマジロオニグモは普段は葉を巻いた住居の中に潜んでいて、網の中心には出てきてくれないのである。高野先生が葉をのぞきこんだ。「いるいる。アリをかけてみよう」。そこで、僕と先生はアリを探した。ポイッと投げると、うまく網にかかった。その瞬間、ゴマジロオニグモがさっと網の真中に出てきたのである。やった！クモはアリの方を向くと脱兎の如く駆け寄り、アリに糸をかけ始めた。高野先生のカメラのストロボがバシッバシッと光る。そのうちにクモはまた自分の住居に引っ込んでしまう。「出てきましたね」「うん。しかし、真中に出てきたところがうまく撮れなかったな。もう一匹アリをかけてみよう」。そこで今度は私の持っていたアリをかけた。クモは又も飛び出した。高野先生のストロボが光る。クモが真中に留まるのは一瞬だ。すぐにアリの方向を確かめ、動いてしまう。「撮れましたね」「うん。でも、もう一度やってみよう」。再びアリを探して、網にかける先生。クモもよく出てきてくれる。「今度は撮れたでしょう」「うん。もう一枚撮ろうかな」。またですか！再びアリを探す。網にかける。見ていた僕の方が先にまいってしまった。ゴマジロオニグモは高野先生に任してとばかりに、先へ進む。また別の所にも網があった。だいぶ経ってから高野先生が歩いて来られた。「うまく撮れましたか」「うーん、どうかなあ。撮れたと思うけれどもね」。僕はこの答えを聞いて、感動してしまった。先生ほどの写真の腕を持った方だからこそなのだろう。一枚の写真を撮るときの根気強さと、謙虚さに感じってしまった。先生の自然に対する謙虚さは「自然に学ぶ」姿勢から育まれたものであろう。僕は食事ときに先生がして下さった蜂の話をお忘れしない。東海大出版会『クモ』のゴマジロオニグモを見るたびに、楽しそうに生き物の話をしておられた先生を思い出す。先生のように生き物を語れる人間になりたいと今でも僕は思っている。（東京クモ談話会誌『KISHIDAIA』52号より）”

ムラクモヒシガタグモの観察でも高野氏の「小観察より」をだいぶ参考にさせていただいたのである。『クモ』（東海大学出版会、フィールド図鑑）が最後の著作になった。

『Wの悲劇』（沢井信一郎脚本・監督、荒井晴彦共同脚本）と『俺たちのウェディング』（根岸吉太郎監督、丸山昇一脚本） 池田 博明

1984年12月15日、公開初日に『Wの悲劇』を見た。オリオン座のもっとも狭い（60名程度の収容）イエロー・ホールで、超満員という悪条件の中で見たのだが、『俺たちのウェディング』を見た時と同じような満足感だった。

自我の分裂とたたかい、新たな表現を求めて苦しんだ多くの人が、発達したマスコミの中で実生活を演じてニヒリズムに至った人々。日本の近代文学の草創期に西洋と日本の溝に落ち込んで傷ついた人々。それらの人々の霊をふと思い出した。

薬師丸ひろ子（静香）は「もうひとりの自分」と付き合っていくと言った。それを「もうひとりの自分」から逃走したはずの世良公則（昭夫）は、拍手で祝福する。彼も一歩退いて、もうひとりの自分を生きてみせるのである。

「もうひとりの自分」に気がつくのはなにも役者はかりではない。だれもが多かれ少なかれ、「もうひとりの自分」を抱えている。ときに、自分の『仮面』に嫌気がさしてしまう。昭夫の長話が心にしみてくるのは、それが私たち自身の姿にそっくりだからである。しかし、映画はまだ半ばだ。映画は「もうひとりの私が泣いちゃいけないって。ここは笑うところだって」とばかりに、笑うはずの「静香」の情一杯の泣き笑いで終わる。そこに人生を見事に演じようとするひとりの少女の意志と情熱を見て、私たちは感動する。

「役者でしょ！」と元気づけられているのは「静香」ではないのだ。「芝居するのよ！」とそそのかされているのは私たちなのだ。太宰治は「もうひとりの自分」が『トカントン』と叩く音に、とうとう呑みこまれてしまった。伊藤整は苦悩のあけくは芸の理論を生みだしたのではなかったか。しかし、渡辺一夫は『偽善の罫め』で人間の普遍的な狂気と付き合って生活することを罫め、中村雄二郎は『仮面』こそが精神の多義性を保証するものであると判断する。演技こそ人生である、素顔よ、仮面を引き受けなさいという主張は、生活を多義的にする。

「自分を演じてしまう」主人公を最も魅力的に演じてきたのはショーケンである。『約束』（斎藤耕一監督、石森史郎脚本）や『青春の階段』（神代辰巳監督）、そして『もどり川』（神代監督、荒井晴彦脚本、津城三樹彦原作）。ここでは演技は悲劇をよぶものであった。「昭夫」はこの系譜にある。世良公則が薬師丸ひろ子にからんで自分の窮乏を述べたてるところは、どこか『約束』でショーケンが祥恵子にからむところを思い出させはしなかったろうか。『白い指の戯れ』（木川英監督、神代辰巳脚本）の荒木一郎が伊佐山ひろ子と共に、看板をさかさに読むシーンの情感に劣らない。

さて、次第に、演技こそが精神を解放することを示す作品が登場してくる。その崩壊は『蒲田行進曲』（梁作欣二監督、つかこうへい脚本）にあった。風間杜夫（銀四郎）は演技が実人生になってしまっていて、そのことをちっとも自覚していないところが魅力だったのだ。しかし、映画自体はまだ平田満（ヤス）の方の演技と実人生との間のヒビ割れに力点を置いて描かれていた。たとえラスト・シーンで「すべては芝居」でしたと書き割り

を取り除いてみせてくれたとしても、ヤスに力点が置かれていることが悪いというのではない。だが、完全にスタイルとして取り込んだ革新的作品としては『俺たちのウェディング』を待たねばならないのである。

そこでは、なんと軽やかに登場人物は人生を芝居にしていたことだろう。時任三郎も宮崎美子も伊武雅刀も美保純も、みんながみんな楽しそうに自分の人生を芝居にして演じているのだった。時任三郎が宮崎美子に聞く。「おまえ芝居できるか?」。宮崎美子が答える。「え?学芸会でなら、やったことがあるけど」。殺人者の前でふたりが演ずる喧嘩芝居の泥くさいこと!まさに学芸会であった。それは感謝的におかしかった。いつもフツーに人生を芝居にしている彼等にとっては、そんな風に演じることが真実なのである。

この作品では当初から、時任三郎は芝居をしている。観客を意識している。結婚式の当日、「出張先から駆けつける新郎」という役を楽しんで演じようとするのである。ところが、思いもよらぬ結婚式射撃爆破事件でただならぬ騒ぎに巻きこまれてしまう。彼は演技をやめたりはしない。なにせ身についているのだ。会社で「ただいま、帰ってまいりました」なんてふざけてみせる。恋人と「イノキ!」をやる。一人だけの部屋で、新婚夫婦の両方の役を演じる。宮崎美子も同じだ。九州の彼の実家で「感心な嫁」を演じてみせて、みんなを感動させた後、仏壇の前で観客に向かってペロリと舌を出してみせる。『冨田行進曲』の松坂慶子をパロットたのである。伊武雅刀の警官はまったくリアリズムとは別である。美保純は「あんたもカッペか」という形で時任三郎の演技を祝福してくれる。最後に宮崎美子はなんと「ウランちゃん」の扮装をして彼の救出に来てくれるのである。エンド・タイトルの後もふたりは「アトム」と「ウラン」を楽しそうに演じているのだった。もう一度言おう。『俺たちのウェディング』は大傑作だったのである。

そして『Wの悲劇』である。今度は、鮮明に主張して来た。しかも芝居の話という構造の中に、見事に組みこまれた形で。新鮮な映像のリズムに支えられて。

登場人物が演技を意識しているだけ、『俺たちのウェディング』の軽さが無いのが残念だが、実人生と演技の関係をとても分かり易く理解することが出来る。「静香」が二階の目窓の窓から「昭夫」に向かって、裾をつまんで挨拶して「みせた」後に、カーテンを「チャッチャッチャッ」と言いながらしめるシーンが続いたとき、この作品を気にいることが確信できたのである。

悲劇がクローズ・アップでとらえられた人生であるとすれば、喜劇はロングでとらえられた人生である。(山田宏一『シネ・ブラボー2』 足塚訂版『映画について私が知っている二、三の事柄』) ケイブンシャ文庫より。ゴダールが伝えるチャップリンの言葉)

これも『俺たちのウェディング』と『Wの悲劇』のキー・ワードである。

★28

水俺たちのワエティンク

●大塚ロビン
●日守新一
●山本嘉次郎
●10月10日

「運命」や「街角物語」などで実力を見せた根岸吉太郎監督のメガホンによる「俺たちのワエティンク」で昨年映画に初出演・初主演、幸運なデビューを飾ることのできた宮崎美子に、一年前の映画出演のこと、あれこれをインタビューしてみた。

■ワンシーン、ワンカット。
TVはTVの良さと、うものがありますけど、俺たちのワエティンクは、監督やカメラマンがそばにいてくれて、ワンシーン、ワンカットが原則でしたし、今から思うと結構かしこい、やっぱりいいものです。



▲ネグリジェ姿で大塚ロビンのシーンも
■鉄腕アトムは、偶然!?
番愚では7分ほどの身振しのシーンがありました。時任三郎さんと私が伊武雅刀さんのまに遊びに行つて、天ぷらを並べたことになるシーンだったんですが、私がそのまに訪ねてくる前から通算すると、午後3時から翌朝まで撮影にかりました。時任さんは、もう天ぷらを見るのもイヤだった(笑)。

宮崎美子

●533年、熊本生まれ「元気です」でラマデビュー、「やどかり」は夢をみる(NHK)に出演中



時任さんのアドリブがラストシーンを変えたの

その場面では山岸一三郎のシフトに無かったんですが、時任さんが監督から何でもいから飲えって言われて、鉄腕アトムの主題歌を歌ったんです。
だからラストシーンで時任さんと私がアトムとワンシーンになって登場したんです。撮影の前日に突然フランちゃんの変装を着るようになって、新曲の曲を走らされたんです。もしもあの7分間の長回で時任さんが別の歌を歌っていたら、ラストシーンも全然別のものになっていたかもしれませぬ。



▲根岸監督の演技指導で女優問題

■女優としての自信がいった。
私はとても演技をするのに時間がかかると言われて、いつも心残りなんですが、映画はこれらの気持ちで熱してくるまで、みんながジーンと待っていて、いざカ

メラが回りはじめると、やりたいうようにのびのびやらせてくれました。最初は緊張してガチガチになっていきましたけど、スタッフの方達にうまく気持ちをほくほくさせて、なにかに楽しい映画や

お仕事ができました。一本の映画をやり終えたというところで女優としての自信がいったし、意欲も出てきました。
またそれまでは、どのパートの人かどういいう仕事をしているか、知らないことが多すぎたんですが、

例えば、照明や大道具の方達が、時間をかけてなせ粘るんだらうかというところが、この映画を通してよく分つたような気がします。
映画の次回作は、根岸監督の「乱」にチヨロビツと出演する予定です。とても楽しみです。

ドサ健児 鹿賀文史

森崎東「ロケーション」制作発表 松竹株式会社

今年のヨコハマ映画祭は2月3日(日)で、会場は神奈川県立音楽堂である。わがベスト・テンは①ロケーション(森崎東脚本・監督の傑作)、②名探偵ホームズ(劇場公開では『青い紅玉の巻』が特に気に入っている。毎週火曜日7時からTV放映)、③ときめきに死す(森田芳光脚本・監督の傑作)、④麻雀放浪記(和田誠監督、会心のデビュー作)⑤うる星やつら2・ビューティフル・ドリーマー(押井守脚本・監督。このパンフレットには最優秀賞をあげたい。第3作も公開が近いが今度は2作目の作画監督やまざきかずおが監督する)、⑥風の谷のナウシカ(宮崎駿脚本・監督)、⑦さらば箱舟(寺山修司の遺作)、⑧喜劇・家族同盟(前田陽一監督)、⑨悪魔殺人鬼・冷血(渡辺謙監督)、⑩人魚伝説(世田敏春監督、『湯殿山麓呪い村』もよかった)。ヨコハマ映画祭のテンと重なったのは『麻雀放浪記』(1位)『風の谷のナウシカ』(3位)『人魚伝説』(4位)『さらば箱舟』(7位)『ときめきに死す』(9位)『うる星やつら2』(次点)。

森崎作品が等外なのが残念である。

鹿賀丈史 - 悪漢礼讃 第6回ヨコハマ映画祭パンフレット「主演男優賞」～

ドサ健は悪漢である。ピカロである。『麻雀放浪記』はピカレスク・ロマンである。何と魅力的な悪漢であろう。敗戦、焼跡。半年のうちに世相は変わった。醜の御婚といで立つ我は。言葉たちは花と散ったが、同じ彼らが生き残って闇屋となる。バクチ打ちとなる暴力団となる。思えば、『仁義なき戦い』(73年)は陰画であった。『麻雀放浪記』は陽画である。

ドサ健の哲学は、自分の牙は自分で磨けという、きわめて健康的なものだ。生きよ、墮ちよという墮落論が健康的なのは、墮ちる自分を信じているからである。自分から出発せよ。もはや頼るものはない。出発すべき自分があることが強みである。焼跡のバラック。タバコの火で鹿賀丈史のドサ健が浮かび上がったとき、身体が震えた。虎に「チンピラ」よばわりされて、「よく聞こえなかったぜ。外でゆっくりまいてやろう」と言ったときの声のドス、脳天に響いた。全身これ、不良である。一匹狼という形容がふさわしい。くだくだしく悩んだりしない。夢のヒーローである。映画館を出ると、ドサ健みたいな歩き方をしてしまう。『現代やくざ・人斬りや太』(72年)の文太以来、そんな同化できるヒーローがいただけるか。ドサ健になりきってセリフを言ってみたりする。ドサ健名セリフが多い。最高は「俺あ手前っちは死んだって甘ったれやしねえが、あいつにだけはちがうんだ。あいつと、死んだお袋と、この二人には、迷惑かけたってかまわねえんだ」だろう。一家言を持つ者が善人とも言える、なぜなら彼等は他人に教えることができるからだと言ったのは小島信夫である。そうなのだ。実はドサ健は善人なのである。

『野蠻死すべし』(80年)で鹿賀丈史に惚れた。これほど身体から「不良」感覚を発散する役者がいるだろうか。テレビ『天皇の料理番』のcock見習い役は、ちぐはぐな所が魅力だった。油断すれば、仕事をさぼる、悪事をはたらくように見える所がよいのであ

る。『悪霊島』（81年）も『疑惑』（82年）も鹿賀丈史ゆえに見に出かけた。『悪霊島』など、金田一役の鹿賀丈史ばかりを見ていた。『疑惑』は桃井かおりの元情夫というチョイ役であった。いかにも軽薄すぎたが、愛すべきところのあるワルの役だった。見る人はちゃんと見ているものだ。『麻雀放浪記』のドサ健は見事に鹿賀丈史を生かしたのである。悪漢 万歳。

映画『GHOSTBUSTERS』 池田 博明

雑誌『EQ』43号で、増淵健氏が、なぜこれがアメリカで受けるのか私にはわからない、アイデアは批評にまで昇華されていないと思えるのだが、なぜかわからない面白さをアメリカ人は感じるのだろうかと評していた。増淵健の世評版は、その読んで面白い名番『西部劇』（三一新書）以来信じている。そこで、これもさほど期待せずに見に行ったのだが、面白かった。映画も面白かったが、観客の反応がまた面白かった。中学生くらいがよく反応して笑っていた。その反応ぶりがすごいのである。役者のほんのちょっとした表情の変化やリアクションをとらえて、声をあげて笑っているのである。エキクロイドのとはけた応対ぶりにドッと来る。図書館で彼は「聞け！においかする」と言う。ここでドッと来る。老婆の幽霊が急におそいかかってくるので、三人はあわてて逃げる。職員が「どうでしたか」と聞くと、逃げながら「後で」と答える。ここでドッと来る。TVのCMで三人組がそろってゴーストバスターズの宣伝をすると、そのそろったところでドッと受ける。アパートに采たマーレイの仕ぐさのいちいちに笑う。ホテルで感知器を持ったライミスが、部屋に入ろうとする老人の近くで反応が高まったので、器でちょっとその老人を押ししてみる、老人はげげな顔をしてライミスを見る、こんなささいなリアクションも見逃さず、「ワッハッハ」と笑うのである。よく面白さがわかるなあと感じてしまった。つくづく今の子供は火星人だなと思った。それもアメリカナイズされた火星人かもしれない。映画『ゴーストバスターズ』そのものの内にある考え方は、民間の組織が街を守るのを支持するという自警主義的なものであった。環境行政の役人を、役人根性丸出しの、国の権威を傘に采た悪役に仕立てあげている。

郵便往采（最近 10年前のみんなのミニコミを読み返しました。手紙の往采が激しくて、なにかに肌えたように、書いていたことを思い出しました。みんなの手紙も、とても面白かったことを思い出しました。そこでこれからも読者のお手紙の一部を紹介するこの項を設けたいと思います。全員は御紹介できませんが、お便りもよろしく。）

山内「だんぜん『名人芸と誰にも出来る授業について』が面白かったです。教え方の素晴らしさと、生徒の理解度が必ずしも一致しない点、フツーの人が先生をしている点・なるほどなるほどとうなずきながら読んでいました。うちのカミさんも小学校の教員をやっていますので、おりおりに話をしてみたいと思います。理科Ⅱ答案とあるところに原発と戦争についての各目の意見が書かれていることに驚きました。理科でこういう設問を

した教師に私は生まれてこのかた出遇ったことがないのでね。そこがすばらしい。で、原発について書かれた生徒さんへ、『私達の使用する電力は今、その2/3を原子の力に頼っています』というナレーションが、ローカル局の6時のニュースに流れます。電力会社がスポンサーになっていて、昔ながらの漁にたずさわる人々のくらしを写しつつ、空から原発の全体が紹介されます。明るい未来がそこにあるというわけです。省エネ、省エネと3、4年前にブブンかしましかったのがうそのような現在、使用する道具がどんどん電化されることにもうれつに反発したい。私は、原子力が2/3の電気をまかなっているのなら、残りの1/3の方で我が家はくらしたく思う。そして、なるべく電力にたよらぬくらしのあり方の方を思う。原発をとりまく管理の力の恐さの果てには、誰かいったいそれを望むのかという問いがなければ、何気なくドライヤーだの電気仕掛けの暖房器だの使ってしまう。いったい誰が望んだのか、必要としているのか、という目で一遍、自分の身のまわりのものを点検してみることを提案します」(香川県木田郡牟礼町より。山内さんはいづ前から生活のあり方を考察されています。)

塚田 「今回の『鹿野忠雄と高橋良一』はいいお話でした。世の中にはほんとうに偉い人がいるものだと思つづく思います。寿命が伸びたといっても短い人生です。ひとり静かに我が道を行きたいものです」(台東区立下町風俗資料館のパンフと『昭和庶民史』展のカタログを頂きました。このような資料館があることを知りませんでした。今度行ってみたいと思います。カタログも入念な素晴らしいものです。『庶民史』の方は、50年代までを扱っています。赤坂行雄『戦後欲望史 黄金の60年代』(講談社文庫)がその後を扱っています)

内海 「鹿野忠雄と高橋良一の項 おもしろく拝見しました。また“どっちつかず”なのは世田先生ばかりじゃない。我らが仲間の共通項だと思いませんか？もちろん、そのことに安心などしているわけではないのですが、そんなにムリしてもしようがないからポチポチこようよ、というふうな気分になってきています。また新しい年ですね。ちょっとあきちゃうね。でも、イイことありそうだなという前向きな予感を信じて、がんばってみましょう。毎年こんなふうなんだけどさ」(東京足立区より。LUCYから、キネカ大森の『人魚伝説』再上映の券を頂きました。ありがとうございます。いつもお手紙感謝します。)

鍵和田由美「若い頃に文学作品を読まなければいけないという義務感のようなものを感じ、勝手に自分で『夏目漱石読後計画』なるものをたてましたが、思うように進みません。今は『三四郎』を読んでいます。短大の近くに、漱石の住んでいた家の跡があるそうなので行ってみようと思っています」(小田原市より。僕も漱石を大学1年の夏に読みました。最初に手に取った『それから』にショックを受けました。)

池田雅夫「最近号の『名人芸vsふつうの人』論には賛成。料理的観点から言えば、林竹二のはレストランの食事であって、毎日の食卓のものとは違う」(僕の弟です)

瀬戸 「お子さんのお話も、新しく気がつかせてくれたりすることが多く、楽しく読ませてもらっています。保母という仕事も2年になってしまいます。相手が人であり、子

供となると思いもよらぬことが起こるものだと痛感した1年でした。ある程度慣れても、子供とのかかわりはいつでも新鮮です。楽しいだけではありませんが、子供と接するときは、やはり明るく、元気でいたいという感じです。日々の生活に精一杯の光海学園の子供たちですが、みんな“イイ顔”をもっているのです」〔南足柄市より〕

林 「“今の高校生は”なんて、よく聞きますが、皆それぞれの世の中を問題意識を持って生活している姿がよくわかりました。私が高校時代には教科書検定のことも知らずにいました。勉強にもいろいろあって、テストで済んでしまう目先のものにとらわれて、一日一日過ごしていました。それもひとつの高校生の姿でしょうが、新聞上の世論や、ニュースに関心を持って考える態度が不足していたように思います。大学4年間で少しは考えられるようになったものの、4年という月日の短さを今さらながら思い知りました」〔北海道釧路市より。林さんは、卒論をまとめているそうです。〕

飯沢 「いつも、ためになる、楽しいお手紙をありがとうございます。早いもので、中学校の教師として就職して、9ヶ月がたってしまいました。楽しいこと、つらいこと・・いろいろありましたが、これからも努力を惜みず頑張っていきます。今年もよろしくお願い致します」〔栗野市より〕

大宮 「楽しく読ませていただいています。反応を送りたいといつも思いつつ、サボッてばかりいます。ゴメン。愛読者が増えていて、まわし読みをしています。なかにはノートをとっている人もいます。頑張ってください」〔山形県蔵王より。ノートできるところなんてあるのかしらんと恐縮しています〕

新沼 「わが84ベスト3は『風の谷のナウシカ』『瀬戸内少年野球団』『すかんぴんウォーク』」〔東京都江東区より。僕は『瀬戸内一』を見ていません〕

牧村 「いつもミニコミありがとう。84年度わがベストワンは、森崎東監督『ロケーション』。今春公開の略称『生きてる党宣言』にも大期待。映画書房から『にっぽんの喜劇映画PART2・森崎東篇』も出ました。」〔奈良県桜井市より。映画書房の本は素晴らしい本です。郵便振替口座『東京2-52771 映画書房』に「森崎東篇希望」と書いて2100円を振り込むと（本代は1800円、送料300円）送ってくれます。これまでほとんど挙げられることのなかった『喜劇・生まれ変わった煮五郎』『喜劇・街の灯』『喜劇・持出しヒモ天国』もきちんと取り上げられています。略筋も心のこもった綿密な紹介です。筋の粗述の細かい解釈は僕と違うところがありますけれど、それはむしろ当然です。映画の本は山根貞男『活劇の行方』（巨思社、2000円）も出ました。この本を見ると映画が見たくなるという素晴らしい本です。勝新太郎の『顔役』や『警視K』もちゃんと評価しています。前田陽一や森崎東論も充実しています〕

遠藤 「毎回通信を楽しく読ませていただいています。我方もできるだけのはきはやろうと毎日いそがしく暮らしています。私は関西（中・四国 近畿）のブタのエサを今もいじっており、嫁ハンは産直に首をつっ込んでいるようです。学校は大変でしょうけど、先生も子どももできるだけ自由であるように」〔兵庫県宝塚市より〕

冬の日に 柏木 Jan. 4. Fri. '85.

あけまして、おめでとうございます。

今日は曇空ですけど、昨日の雪には驚きました。私は丁度バイトで箱根にいたので、この冬初めての雪をたっぷり味わうことができました。登山電車で風祭（かざまつり）を過ぎたあたりから、雨が雪にかわりはじめ、私の大好きな塔の沢のトンネルをぬけた所では、もうすっかり雪化粧でした。車掌さんはまだ苦くて、信号所で停車すると、すれちがう車両の車掌さんに雪つぶてを投げていました。雪は車両にあたると雪国の雪のようにパッと飛び散りました。電車の中は暖房がきいていて、ワイパーの音や、人々の低い話声を聴いていると、あたたかい気持ちになります。小さな男の子も、中年の女の人も黙って降る雪を見つめていました。あいかわらず、カシャッカシャッと窓ガラスをこする音が聴こえてきました。

美術館に眷くと、雪かきが待っていました。道具のない人は竹ぼうき、デッキブラシなどで、道をつくります。その間も雪はふりつづくので、道の上にもたまたま、うっすらとつもっていきました。2日に、屋外の彫刻を「ピカピカにみがきあげた」という同じバイトの男の子は、雪をかぶった彫刻を悲愴な顔で見上げていました。それでもお客さんはやってきます。雪の美術館も、なかなか美しいのです。私もお茶の時間に、ひと通り、見て回りました。

暮の28日に念願 悲願の『モリエール』を見てきました。家族中の大ヒンシュクを買ったのはいうまでもありません。吉祥寺まで、4時間もある映画を見に行ってしまったわけですから。といっても、映画を見に行ったということは、今だに秘密です。とても言えるムードではなかったものですから。

誰もいない階段をうつし出したラスト・シーンから、長々と続いたタイトルの間、場内は静まりかえって、誰ひとり動こうとしませんでした。誰もが同じ事を考え、同じ衝撃を受けることがあるとしたら、例えばこんな瞬間です。ラスト・シーンにはそれだけの力がありました。それはモリエールの死にさまではなく、監督マリアーヌ・ムヌーシュキンの力なのです。血みどろで、舞台化粧がはげ落ちたまるでガイコツみたいなモリエールや、まわりの人々に、カメラはしっかり目をすえて、決して目をそむけません。そして私達にもそうするように強要してくるのです。両脇をかかえられて、顔をあげたモリエールの姿は、開き直りに近いような形で「これが死ぬということだ」と叫んでいました。

映画は途中で2分間の休憩が入って、上映時間は4時間。前半は無名時代のモリエールの姿です。幼い日に見たスカラムーシュの姿を胸にいだいたまま、輝く瞳を残して青年になったモリエール。カメラは空をふわふわ飛ぶ人の視線になって、人々を見わたすのですが、その視線の交差の間に、ジブシーの低くつぶやく声がひびきます。今まで見た映画で

こんなに美しい場面は、ちょっと思いつきません。カメラと一緒に私の心もふわっと浮きました。仏語は、本当に美しい言葉ですね。

第二部からのモリエールは、そのとりまく環境のせい、か、どんどん暗さを増していきます。広い草原を、強い風に乗って走る舞台をおいかけ走り回った彼の姿はもうなくて、心の中ではより「高級な」悲劇にあこがれながらもかなわずに、喜劇を書くのですが、その上演においてもパトロンの庇護と芸術家としての信念の間で苦悩する現実が、とにかく重い。第一部では、放浪の、でも自由の人生を送っていた、自分の思う通りに生きていたモリエールが、王や貴族の御機嫌をうかがう姿は、悲しい程です。

見終わって、一度も時間を気にしなかったことに気付きました。4時間が、あっという間でした。帰り道一緒にいった友達と「映画を見たー！って感じね」とくり返してばかりいました。普通だったら、あーだこーだと語り合うのでしょうか、見終わってすぐは、ただただ「映画だったわねー！」でした。モリエールの人生をあの映画のまま、伝記にしても月並みだと思いますし、多分、演劇でもダメです。あの俳優で、あのカメラで、あの監督でなければだめなのです。

『東風』の12/13日分の中の原爆の感想文の中に「お弁当」のことがありましたが、あのお弁当は私にも忘れられません。

戦争を題材にした小説や日記、手記は、ずいぶん多くありますが、例えば『アンネの日記』のアンネのような若い人々を考える一方で、私がどうしても考えてしまうのは、当時、軍国少年とか、軍国少女とか呼ばれていた人達のことです。彼らは体制に甘んじていたわけでも日和見をしていたわけでもありません。ただ、若い人なら誰でもそうするように、自分の信じるものを熱愛していたにすぎないのです。しかし、その純粋な正義感によって努力すればする程、真善美や正義と正反対の方向へ進んでゆく、その結果が儼然であり、あのお弁当箱です。そして、敗戦によって自分がすべてをかけて努力してきたものが、何を生み出してきたかを決定的に知ったのです。そして、その事実を認めて、また生きてきたのです。オイディプス王のように。

どの時代も、若い人々は真実を求め、そのために努力をするのでしょうか。そんな中で、ひたむきに、純粋に、善になろうとすればする程、悪になっていった人々、今の私達と同じ事を望み、私達以上の努力をしたのに、むくわれることなく、アンネ・フランクの戦争の罪は一般の人達にもある、という言葉の具現のように、自分のしてきたことの本当の意味を思い知り、価値観が瓦解するという、悲慘な結果しかゆるされなかった時代の若い人々を、アンネのような反戦主義者同様、忘れたいのです。

窓の外では雨が降りはじめたようです。今年のお正月は、バイトに出ているせいもあるのでしょうか、とにかく、まるっきり、お正月気分ではありません。年末もあちこち、とびまわっていそがしくぜんぜん年の瀬気分ではありませんでした。今年こそは、年末年始をたっぷり味わおう！と思っていたのに・・・このまま二度と味わえないのではないかと不安なのです。ただ、おせち料理を作っている時は、とても楽しくて、なべのシューシュー

一いう音や、温かい湯気や、ピカピカにみがきあげたガスレンジにジュッと落ちる煮汁の音は、とてもいい気持ちです。

というわけでお正月も4日になってからこんな形で、ごあいさつすることになってしまい、申しわけありませんでした。今年も、世界を開くべく、がんばっていきたいと思います。どうぞよろしく願います。

〔池田付記。文の後にになにかを書いたりするのは失礼なことなのですが、あえて一言。柏木さんは19歳。文中「美術館」とは「箱根彫刻の森美術館」のことです。「お弁当」とは、NHK特集『君は広島を見たか』で紹介された広島平和祈念館にある黒こげのお弁当で、わか娘に持たしたお弁当を母が探し出したものです。どうぞ、もう一度、しなやかな感性と強靱な論理と、朗明な表現でつづられた柏木さんのお手紙を読んで下さい。なお題名は池田が仮につけたものです〕

寅さんは何処へ 竹内 1973年3月3日

無職渡世の“フーテンの寅”は、“寅さん”で通るほどの人気者になってしまった。

でも、最近の“寅さん”は、なんとなくインテキ臭くていやになってきた。だから、少しくらい文句を並べても、もう何も感じていないかもしれない。こんなことを書いても、「反省と後悔」なんて、いまの“寅さん”に期待しようと思っているわけじゃない。

このシリーズは、ヤクザな“寅さん”が、自分の心の中にずうっとくすぶり続けているさびしさを、とてもいい感じで画面の上に表しているのが、たまらない魅力だった。

放浪が幸福への志向であり、それが無知ゆえに、体いっぱいにおろかしさをまとったあの“寅さん”であるゆえに、このシリーズは、ぼくにとっては、とてもいい映画だった。

それに妹の“さくら”が、とてもいい。「おにいちゃん、くやしかったんだよね」。そんな妹にコックンと頭を垂れて涙ぐむ“寅さん”。いいなあ。ぼくは、“さくら”の思いやりと“寅さん”の単純さが好きだった。

単純ゆえに、幸福への志向も、誰にも負けないほどいっしょうけんめいであり、心の傷つき方も一層痛々しく感じられた。

しかし、この男は、罔々しさ、時には恐ろしいほどの残酷さをも表現する。第9作目なんかでは、とってまこわい顔をした“寅さん”を見てしまった。さびしさなんて感じられなかった。

よく問題になる第5作目『聖那篇』以降の“寅さん”は、なんとなく一人歩きしだしたようだ。

『話の特集』73年2月号で、山田宏一さんは「お説教が多くなって……。フーテンの寅さんは、もう幸福を求めなければならぬほど不幸ではないのかもしれない」、そう書いている。

でも、“寅さん”には、お説教などという言葉があてはまるだろうか。グチがあまりに

も多く出てくるので、お説教などと言われるようになるのだ。“寅さん”は、倦くなってしまったのかなあ。その時、このシリーズは“フーテンの寅”なんかじゃあなくなってしまうと思う。

“寅さん”は、やはりさびしさを身にまとった無職渡世の旅がらずでなくちゃあいけない。さくらになぐさめられて、頬に涙を伝え落とす“寅さん”が、ぼくは好きだ。

グチをお説教と受け取られるようになってきたのは、おろかしさをめぐり去った“寅さん”が登場してきたからだ。

このシリーズを愛する一人として、最近はとて不安になってきた。現実とあこがれの淡い感じを一人の男“フーテンの寅”に託している“寅さん”シリーズ。

思わず、両足を放り出して拍手したくなる晴天の江戸川の土手、イントロの音楽。

そんなやさしさが、この映画のすべてを象徴していたはずだ。それを大事にして欲しい。それがこれからの“寅さん”に対するお説教でもあり、ぼく自身の期待と嘆きでもある。

〔1973年当時の付記 池田 博明〕

竹内君は、ぼくと同学科の、時には一緒に映画をみに見にゆく友達です。ずっと『男はつらいよ』シリーズを見てきたひとりとして感想を書いてもらいました。テキヤというやぐざな稼業の寅さんは、無宿渡世というより、無職渡世という方が似つかわしいのかもしれない。しかし、『寅次郎夢枕』では、テキヤをセールスマンといい替えたゾ。笑ったなあ。ちがいない。

ぼくは寅さんに、塾いこんでいてもらいたい。その塾の良さは幾分、から元気みたいな構造になっていて、「寅さんは本当は孤独なのね」「さみしいんだ」という印象を与えるのだが、ぼくはむしろから元気であっても、その元気を支持するのです。初期の寅さんは「俺はバカだった」と自分の身のほどみたいなものを認識して、旅に出る人だったのが、最近、他人の気持ちまで、わかりすぎるくらいわかる人になっているように思えます。

『寅次郎恋歌』では、だまって池内淳子の話を聞いていてそっと身をひく寅さん。『柴又慕情』『寅次郎夢枕』でも、わかりすぎる人のように思える。『フーテンの寅』（森崎東監督）で、話せない花沢徳衛の代弁をし、「分かっておりますよ、あんさん、ご同業さんでしょ」とくる。この「分かっておりますよ」が欲しいのです。だまって身をひいたら、あんまり露骨にさびしいのです。『寅次郎恋歌』『柴又慕情』の真情告白的長ゼリフも、ぼくは買わない。空を見つめて、〇〇論を話す寅さんなんて、サマになりすぎています。短く「馬鹿だから働いているんじゃないねえですかい」という風にキめてほしいし（『柴又慕情』）、さくらの地道に暮らせとのお説教を「地道、うん、分かってる」なんて神妙に上の空で聞いて、外へ出ると、登と肩叩きあい「うまくいった」なんて金をまきあげたことを喜ぶ寅さんであって欲しいと思っています。いつも期待しています。）

（『望御篇』）

“寅さん”が期待したようには変わらなかったのは衆知の事実である。竹内さんは、大型免許を持っています。ダンプの運転も出来るのです。卒業後、低温科学研究所でウニのふ化酵素の研究、その後、奥さんと共にアメリカに渡られ、研究を続けられています。

『東風』は彼のところにも送っています。上の文章は1973年当時、キネマ旬報ロビイ欄に鉄屋彰子さんが書いた呼び掛けに応じて札幌の喫茶店に集まったシネアスト達が、毎週持ち寄ったプリントの一枚。コーヒー一杯で4時間喋っているという恐ろしい人々でした。竹内さんが参加した3月3日は鉄屋さんの例会レポートによると「北海道新聞主催のBLC例会でシャンソンと『ラストショー』の試写が行われ、まずそれを見る。時、3月3日4時10分～6時20分。場所アヴェニュー。出席者10名（白石半兵太、白石直義、高村賢治、館田芳彦、品田義次郎、高橋正通、坂東雲一、池田博明、竹内潔、鉄屋彰子）」。アヴェニューというのは札幌紀伊国屋書店の並びの喫茶店。その前は「再来」という喫茶店だった。私は1972年暮の最初から参加し、毎週喋っていたが、73年の5月に急性肝炎になってしまい、出席できないでいるうちにいつのまにか集まりは消えてしまった。入院、帰省し静養して9ヶ月後、札幌へ戻ったところ、和田由美さんという方が（僕は一度も会ったことがない）札幌プレイガイドジャーナルみたいなものを始められたそうで、それに便乗するようなムードを感じた。集団同志の橋の連絡も出てきたらしく、参加者も変わったし、てんでに勝手に隣りの人と好きな俳優の話をする、他は何をしているか知らないという集まりで72年～73年の活気はもうどこにもなかった。「去年（こそ）の雪、いまいづこ」という感じだった。

デイックの『パーマー・エルドリッチの三つの聖辰』が文庫になった。池田

ここ数年、城内高校での作品で面白いものが、3種ある。ひとつは、1979年の文化祭で3年有志漫画研究集団が作った『EVOLUTION』という雑誌。雑誌自体はそれ程でもないが、この年の文化祭のテーマは『REVOLUTION』というものだった。

『革命』から『R』を取ると『進化』になるのである。知っていましたか。このセンスに感心した。それにこの集団はシーツを何枚もつなぎ合わせた垂れ幕を作り、そこにこう書いたのだ。「まんがの方へ自分から」。素晴らしい言葉であった。僕はそれを見ながらとても感心した。ふたつめは放送委員会の番組制作における活躍。今年度も柳下・石井・北野先生が指導され、生徒に付き合っ下さって、神奈川県高校放送アンデパンダン大会で2部門優勝している。殊に放送劇『砂の舟』は、藤田敏八の映画のようである。これは昨年2位の放送劇『鏡よ鏡』と発想は共通だった。つまり歌に触発された放送劇ということである。『鏡よ鏡』は谷山浩子の、『砂の舟』は中島みゆきの歌である。『砂の舟』の素材は占領、混血児、非行、娼婦、自殺、歌手、大阪弁といったもので、後半、若干構成が崩れるが、迫力があつた。なんでも審査員（各高校から出る生徒）の評価はほとんど満点だ

ったという。放送劇でこれ以上のものを作るのは大変だろう。報道部門で『ひとつになれば』以上のものを作るのが困難のように。以前にも書いたが、ずっと前からの蓄積があって、かつ最近の生徒の熱意があって功を奏したのである。入賞するしないにかかわらず、いったん活動が断絶してしまうと再開するのは困難だ。アンデパンダンやコンクールに参加することが所与のものになっている事態を継続させていくことは、先生生徒の努力なしには出来ないのである。みつつめは非公認団体SF研究会（非公認団体という言葉自体矛盾である。無論半分フザけてみたのである）、1982年9月11日発行の会誌『栄養失調』第2号。この会誌は会員の原稿やらイラストやら紹介やらがコラージュしてあるもので、その「奇真面目な」（いま作った造語）感覚が秀逸である。この会誌を中心になって作ったと思われる磯崎聡美さんが書いた文章が『H₃S』というデイック論。H₂Sなら硫化水素だが、はて？H₃Sなんて化合物あったかな。デイックが考案した化合物かと思うと、これが大きい。Hは早川文庫のことでSはサンリオ文庫のこと。つまりH（早川文庫）で3冊、『火星のタイムスリップ』『偶然世界』『アンドロイドは電気羊の夢をみるか』、S（サンリオ文庫）で1冊『死の迷宮』を読んだということなのであった。アハハッハ。この論文はデイック風に記述されている（つまりゴチャゴチャしていると共に勢いがあり、分裂症っぽい）せいか、デイックの小説を読んだような感じがしてしまうという不思議な作品であった。一部を引用しよう。引用部は「」でくる。：「（ブラッドベリは）私に何も与えなかった。萩尾望都『ウは宇宙船のウ』（原作：ブラッドベリ）になんともいえず感性をくすぐられたので、よおしと買ってブラッドベリの本を数冊一度に購入した。『火星年代記』から読んだが、なかなか進まない。しかたないので『何かか道をやってくる』にかかろうとしたが、これは2行までしかいかなかった。なぜだかよくわからないが、彼とは波長が合わないのかもしれないと思い、あきらめた。ここであきらめたのが、私のあさはかなところで、今考えてみると、もう少し読み進めればよかったという後悔の念があとをたたない。しかし、どうしてもあの叙情詩を読みほすには根気がいる。つまり、私が持っていないもの。ま、それは今後の課題。ところでデイック。『火星のタイムスリップ』、それが彼との最初の出会い。求めていたものにやっと会えたような感があった。それは私が考える“狭義の意味でのSF”にあてはまるものだった（ちなみに“広義のSF”とはすべてをさす）。」「こーゆーものもあるのだという安堵感が入り混じり、胸をワクワクさせながら読んだ。私は前書きや解説などは読まない主義なので、えらい人の言っているむずかしいことはわからないけれど（べつにわかりたくもない）、小説なんていうものは感じてしまえばこっちのもの。理解力ではなく感受性を大切にして読むものなのだから（私はそう思っている）、その点でデイックは非常に優位にある。『火星のタイムスリップ』は「おれはマンフレッド・スタイナーの忌まわしい精神分裂病の世界で傷つき、途方にくれている。おれをおれの世界につれ戻してくれ、おれの時間に」というセリフでわかるように、現実と精神の混沌の世界がバックグラウンドになっている。ちょっと考えると、なにがなんだかわからない遠い話のように思える。しかしそれは表現

の手段であって実は我々が普段、思考をめぐらし、歩き、食べている生活の1フレーズ
のどこかとかわりないのである。」：スタイナーのセリフにある自分が分裂しているとい
う感覚、自分本来の時間と世界を取り戻したいという意志。そして、現代、我々の生活が
実はそのように傷ついているのだという感覚。これを奇怪な物体や道具で組立てるのがデ
イックなのである。：「『アンドロイドは電気羊の夢をみるか』に出てくる感情移入度テ
ストは、人間と、アンドロイドとして具象化された現代の画一的で「つまらない」人間像、
人によって作られた「かわいそーに」という心根からの気持ちの欠ける残酷な像を区別す
る手段であるが、デイックはこの“感情”をととても大事に扱っている。それが人間であ
り、また人間でありうるにはその第一条件が“感情移入”なのだ。その切々とした訴えが
伝わってくる。」「デイックは人間の本質をきびしくみきわめようとしながら、とてもや
さしい心を持ちあわせている、あたたかみのある人であるということだ」：同感である。

ところで、今まで読んだデイックの作品の中では一番面白かった『パーマー・エルドリ
ッチの三つの聖痕』がとうとう早川文庫になった。映画化するなら『アルタード・ステー
ツ』を作ったケン・ラッセルにやってほしいと思う一篇。『現代SFの歴史』（増補訂
版1976年）の著者サドゥールは『高い城の男』『ユービック』そして本書を高く評価
している。

郵便往来

城所 「ごぶさたしておりますが、お元気ですか。再々、ミニコミをお送りいただき
ながら、1通のおたよりもさしあげられず、申し訳ありません。筆不精の私の失礼、お許
し下さい。でも、毎回、全編に目を通らせていただいております。母校の現況や、先生の
近況など、手にとるようにわかり、とても懐かしく高校時代が思い出されます。」（小田原
市より）

荒川 「この1年、私にとって授業は苦しみだといってもいいと思います。『名人芸
』に近づきたいと願う心とうらはらに、現実には嬉しいものと、幾度となく思い知らされ
ました。しかし、2学期の授業参観を境に、子どもの発言を引き出すコツを少々つかんだ
ような気がしています。といっても1時間のうちに数分しか満足のいく授業になりません
が、私が考えて行くことよりも数倍もすばらしい考えが発表されると、本当にうれしいも
ので、勉強させられます。だんだんその楽しさを味わえるようになってきた小学校での生
活、産休でもいいから続けてみたいと思っています」（箱根町より。『たのしい授業』を
是非！ 1月号にも頭をガツーンとやられるような記事がたくさんあった。）

及川 「No. 31にあった『死の棘』を読みました。今までに感じたのとは種類の
違う心の重苦しさを感じました。これは何なのでしょう」（小田原市より。）

武 「私は、今年ちょっと違ったお正月。蔵王温泉にて住み込み女中のアルバイト。
朝六時半起床、即トイレ清掃。今日はお風呂の掃除。こびりついたイオウを金のたわしで

百万篇。毎日毎日忙しくて、楽しくて」〔及川さんと武さんは在学中放送委員でした。〕

配島 一「考え方が凝り固まっている時に、手紙を読むと、いつもホッとします。これからがんばって書いて下さい。そのうちに投稿したいと思います」〔小田原市より。〕

渋谷 三「10月に入院しました。それからは毎日非常に忙しく、帰宅も遅くて大変です。でも、患者さんと直接接するようになり、だんだん実感が湧いてきました。あと1年と少しです。今年もどうぞよろしくお願い致します」〔歯科医の勉強をされています〕

武井 三「一昨年9月に父となり、一人娘沙和は一歳四ヶ月、歩きまわり、発声を何かと結びつける知恵がやっとなつてきて、相手をしている時間が互いに愉快なものとなってきたようです。『子供は小さな哲学者』、小生も読んで考えさせられました。『小さな』ということばが、奇妙に不可解であったことを覚えています。冬の間の一生懸命から、季節が変わって、一生懸命、生きていくための準備をしてくれることを祈るだけですが、彼女だけではなく、一般に子供たちにとって、小生、あるいは一般に言って大人たちは、彼等が伸び伸びと活動できる場所を与えると同時に、彼等が自由に振舞うことを意味づけられるような制約者として登場しているべきではないのかと感じています。現在は、どうも逆になっているような気がします。場所に制約され、大人たちには放任されている。彼等が、自主的に考え、生活する業を体得するのは、大人たちが、何らかの理想をもって、何らかのものを、ことを達成しようとする姿に、自分を重ねられるときではないでしょうか。ただ、何となく生きている大人たちが多ければ、そして、自分を制約するものが、自分の外にあって、それに従って（あるいは、それを極い潜って）活動する大人たちが多ければ、それを模倣する「小さな」大人たちが、跋扈することになる。子供に答をみつける方法を教えられるということは、結局、自分が何らかの答をみつける道を数多くもっているということであり、何を求めているかを、ベクトルとして共有できなければならぬ。今、子の親となってその不安を感じています」〔敦賀市より。〕

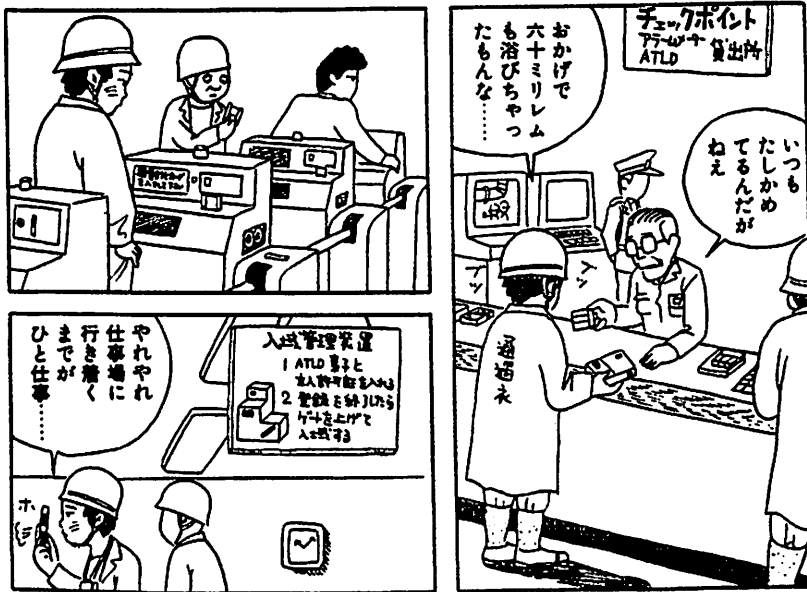
山内 一「若干の訂正をしておきます。“私達の使用する電力は今、その2/3を原子の力に頼っています”は、“四国で使用する電力は今、その1/3を原子の力に頼っています”の誤りでした。うるおばえで書いてしまい、赤面しております。

評判の『Wの悲劇』を見てきました。熱い込んで見ただけに、少々拍子抜けの感あり。私にはあの三田ナントカという女性のあり様が愚かしく感じられ、栗師丸ひろ子の言動もがさつで、何か演出者の意図ばかり見てとれる存在でした。ですから、トリックによる事件の発生以後、その大役をこなさるために自身を力づけるシーンの数々も、さほどピュアに見えないのが大変残念でした。むしろ、トリックの使用される経過を見続けた後に残るヒロインの像は、血まみれの、血ぬられた、かなりまがまがしい像でした。そこが、栗師丸ひろ子というキャラクターのもつ「正義派」と溶けあわず、私は作り手側の計算違いを感じずにはおれません。万雷の拍手を受けてそれにこたえる涙顔の彼女に、ずっと同化できなくて、「なんでこんな顔ができる人に、こんな話を作ったのだろう」と、涙しながら考えこんでおりました。大いに『Wの悲劇』に感じた人に、水をさすような意見で申し

わけありません。私には、三田佳子という映画女優の大きさを感じた映画です。

『天国にいちばん近い島』は、この作品を反面教師として、「子どもを甘やかしてはいけない」という教訓を得る映画でした。国民的女性おしんを演じた乙羽信子までが「若い時のわがままはしておくものよ」と、ヒロインを甘やかすにいたっては、私は座席から落ちそうになった。おしんがわがままままな風潮をしからずして、他の誰ができようや。

まんが季刊誌『ばく』という雑誌に、勝又進の『深海魚』という作品がのっています。秋季号なのでもうお店にないかもしれませんが、原発を扱った鋭い作品です。向こう何年も古びないと思います。作家の姿勢と表現方法を断固支持します」(僕は『天国にいちばん近い島』はヒロインだけでなく、役者をも甘やかしていると思います。過去の大林監督の映画のどれにも感謝したことがないのですが、今回は『金田一耕助の冒険』よりひどい映画でした。大林さんは映画について多寡をくくりすきているのではないのでしょうか。なんでも出来ると思っているような。『映画』という所を『教育』とか『学校』とか、いろいろに入れ替えると自分にもあてはまりますが)



193

↑ 勝又進「深海魚」『ばく』秋季号(日本文芸社)

望月...
「習月さんのところの子供の話 私はよく小鳥に感じます(小さい子供が身近にいないので)。カゴの中にいるのですが、思いもよらない、頭で考えても見つからないような危険があちこち

にあるような気がして。前にやまめの十姉妹のバイにお嫁を買ってきてあげたとき、それまでいれていなかった、カゴの下にはめるさくのようなものを、これをいれれば、水びたしの屑におりることなくなるし・・・よかれと思っていれてやったところ、1日目のうちに、このさくに首をつっこんで(たぶん落ちていた餌をつまもうとして)、自分でムリに抜こうとして首の骨を折って死んだことがあったりして、こういう小鳥の方では防ぎようのない危険から守ってやれるのは、危険を予測できる知恵をもつ人間 私だけしかないなんて思ったりしました。東京はやっぱ、寒いのかな、しもやけをこさえてしまっていたがゆいです(1月15日)」(府中市より。獣医学の勉強をされています。)

川本... 「先日、フニョエルの自伝を読んでいたら、彼が昆虫学を勉強したことを知りました。どうりでフニョエルの映画には、たくさん昆虫が出てきたわけです。パンフレッ

トいつも有難うございます。先日の水死した学生への追悼文はよかったです。北村想の新作芝居『私の青空』は、サロイヤンの『人間喜劇』をもとにした楽しいものでした。(84年8月18日)」(映画を語る喜びに溢れた川本さんの『ネヴァーランドで映画を』(観々堂)を読む。最近、ブロンズ社の『傍役グラフィティ』『女優グラフィティ』を再読しました。新鮮でした。自分の文章にもこんなことを書いたんだなあなんて驚いたりして。ミーカーの『喜劇としての人間』(文化放送開発センター出版部)も再読、三読しています。北村想『私の青空』は見にいけなかったので、本(而立書房)で読みました。北村想は川本さんの『走れナフタリン少年』(北宋社)を読んだにちがいない。) (編集後記。少年少女版ファーブル昆虫記と『三酔人経倫問答』をのんびり読んでます)

子どもは全てを映す プリズムみたいですね。

川本 干刈さんの小説で、もうひとつおもしろいのは、一種の子どもの小説だっ

てこと。二人の子どもの会話が実におもしろい。小説読んでると、それこそ芝居とか音楽とか若い人の文化みたいなものを子どもの方から刺激を受けているというのが非常によくわかる……。

干刈 今までの日本の小説って、子どもをすこく固定的にしか書いていないのね。弱い者だとか、怖い者だとか、ひとつの型の中でしか語られていない。子どもって、それこそナマモノでね、常に変わるし、いろいろな面を持つてるし、すこくいろんな要素がありますね。だから、子どもを見るだけで世の中が見える気がします。政治も見えろし、社会も見えろし、家族関係も見えろ。自分にとってのプリズムみたいですね。男性が家族なり子どもなりを背中に背負って社会を見ているのとは違うのね。川本 ああ、なるほどね。

干刈 私は子どもを見るのが、すこくおもしろい。じっと見ていることで全部光が入ってきて、こつちに映るみたいな感じで見ています。

川本 例えば大江健三郎さんの場合は、

「イーヨー」という子どもがいて、ああいう新しい世界を展開してきたと思うし、日野啓三さんもだんだん最近SFっぽくなってきたのは、あれもお子さんの影響じゃないかと思ふ。想像をこゝます。かつて明治の作家にとっては親が非常に大事だったけれども、今の作家たちにとっては子どももつてもつものが、すこく重要になってきたんじゃないか(笑)と思つています。干刈さんの場合も、それをかなり感じますし……。

干刈 そうですね。子どもを持っていることで、自分は新しい足場がないんだけど、すこく速くまでいけるって感じがするのね。

子どもができる女の人をよく、もう自分を変われなと言いますが、私は逆ですね。子どもは常に反撃してくるから、自分がこゝろありたいと決めてることを、どんどん外側から壊してきますから、自分が変わるきっかけを常にぶつけてくる存在って感じがします。

川本 ひとつお聞きしたいと思つていたのは、男は大人も子どもも含めてピーターパン症候群みたいなことを言われていて、父親は父権を喪失しているし、子どもは父親になりたくないと言っている。その中で母親というのは母性いまだ健在なのでしょうか。

干刈 母性って、判らないんです(笑)。でも、子どもを生んで育てて、ひとつだけ判ったことがあるのね。それは母が私にね、「私は母親なんだから、あなたの考へてることなんか何でも判る」と言った時、そんなことはあり得ないと半分思つてて、でも半分は、もしかしたら本当かもしれないと、ちよつと怖いような気がしたことがあるのね。ヘソの緒がつながつていたんだから……。子どもだから判らないわけ。それで自分が母親になつてみると、やっぱり判るなんてウソだ、というところが判つて(笑)。それが判つたというだけが母親になつた取柄みたい(笑)。

川本 「ウホッホ探険隊」なんか読んでると、何か家族というのは父親がいけない方が幸せなんじゃないか、という気がしちゃうんですけど……。(笑)。

干刈 いけない方が幸せというより、何とていうのかしら、とにかく無意識でやつて行く方が、うまくいくというのかな……。もうひとつ、人間って二、四、五歳のときに結婚して、子どもを生んで、家族という形態だけが延々と続きますね。動物は巣を作つて、子どもを生んで、育てて、

「極楽の本」(1月号)より

川本三郎・干刈あがた 対談

館田 「先日、KENさんと逢い、久し振りにmovie, mysteryの話をしました。二人ともいつまでたっても変わりません。いい事なのか、悪いのかね。去年の暮れから身体を鍛える意味でバドミントンを始めています」(札幌より)。

平田 「ミュージカルのよさは何か。それは歌と踊りです。『スイート・チャリティ』も“もっといいことあるはずだ”のB・フォッシーの振付のすばらしさは文句なしで、ぼくはあのダンスに惚れたけどなあ。それにシャーリー・マックレーンのファニーなよさ。うん。TV放映のビデオは持ってて時々見るけど、やっぱり好きだなあ」(僕が『スイート・チャリティ』のボブ・フォッシーの画面作りがっかりしたことについての返信です)

『人魚伝説』ふたたび

池田 博明

池田敏春監督『人魚伝説』を1月17日、麻沢市での実験講座に参加した後、キネカ大森に見に出かけた。2回目である。行ってみたらティーチ・インが毎日あって、その日のゲストは池田監督と原作者の宮谷一彦氏だった。ティーチ・インについてよく知らずにいたので驚いた。チラシを見て初めて“『人魚伝説』よ、もう一度!の会”を秋本鉄次君や内海陽子さんが主催していることを知った。最初の日は秋本君、前日の16日は内海さんがゲストだったのだ。書いたのは6時頃だった。4時半の回の入場者がティーチ・インに参加できると書いてあった。しかし、入場可能という。ティーチ・インから入場させてもらった。資料を見て池田監督が山形県出身、1951年生まれというので驚く。その音、町ですれちがっていたかもしれない。宮谷さんは自分のように「次如」感覚を持つ人間とちょっと言い「剰余」感覚を持つ人間とがどう運営できるかを語った。司会の方が質問を受け付ける。「2回目の人は？」と問われて手をあげた人が37人中、10人くらい。率直に良かったかどうかを数人の方に問う。なんと4番目に「どうでしたか」と聞かれてしまった。友人の評価を聞いて名画座で見たこと、生まれも育ちも同じで興味があったことを話し、監督にはふたつ質問した。「こんな場所では話せないかもしれないが、もしよければ、若い頃感動した映画の思い出を」「ヒロインの白都真理さんは、最後のアクション・シーンで、藤純子の殺陣が足腰がしっかりしているのに対して、ふらふらしているが、それは批評なのでしょうかと。最初に見た時に、たったひとつ、ひっかかったのが実はそのことだったのだ。あれでは人を殺せないとかえ思った。監督の答は「映画の思い出は酒を飲まないと話せない」ということだった。これは納得できた。映画の話は数人でワイワイやるものだから。アクションについては「みきわ(ヒロインの役名)に、最後まで普通の女の子でいてもらいたかったということですね。批評という意識はありませんでした」と。司会音の方が続けて聞いてきた。「さっき、俺たちじゃなきゅわからない映画と言われましたが、そのところをもう少しどういうことが言って下さい」と。内心僕自身、自分たちの世代にだけ理解できると思っていただけではないので、困った。最初の言い方が悪かったのだ。池田監督が雑誌で「わかる人にはわかる」と言っていたこと、藤田真男君が「自分たちの世代の監督がようやく出てきたと感じた」と書いていたこと、そして名画

度で見た時に若い人が二人、「なんだ、あの馬鹿馬鹿しさは。失望したよ。前の作品はよかったのにな」とけなしていたことが、頭にあって、「俺たちじゃなきゃわからない映画と聞いて」と言ってしまったのである。そこで自分のことを喋ることになってしまった。「追いつめられた音が起死回生、反撃に出るといふ映画。それが学生の頃、あった。ニュー・アクションや東映の『仁義なき戦い』以前の現代やくざもの。学生が叛乱を起こしていた時代だったが、年上の人達は結構若げの至りという見方をしていた。外国でも『いちご白書』の中で大人がイチゴが一時的に赤くなったようなものだというセリフを言う。しかし、自分は『いちご白書』を見た時、これでいいんだって思った。そして、自分は若げの至りという見方をしないぞと決めた。映画もだから、森崎東さんの映画が好きなんです。そうやって今までも生活してきたというところがあるんです」と。こんなに整然と話せたわけではないが。

その後、宮谷さんが話の中で「個の情念を大事にする」という言葉を言われた。なるほどと思った。森崎映画の本を編集した映画書房の野原藍さんという女性の方も見えていて「『ウィークエンド』のヒロイン同様、『人魚伝説』は女が一人で最後まで戦う話であるところで支持する。森崎さんの『党宣言』も原発を相手にした話で、絶対テレビでは放映できないものです」と話された。ティーチ・インの後で、出版の御礼しかたがた、駱筋は誰が書いたのかをたずねた。野原さんが書いたという。『特出しヒモ天国』はどこでもやっていないくて、東映に行き特別に試写をしてもらって作ったのだという。駱筋を評価してくれるとは有難いと言われた。『ガキ帝国』の井筒監督は「これは簡単な映画やと思った。いい奴と悪い奴がおって、という。あがりもそうなる」と話された。『人魚伝説』

乾杯の会があったのだが、それには出席せず、8時からの上映を見た。

1回目で気がつかない色々なことに気がついた。最後の殺りくシーンばかりに目を奪われがちだったが、それ以前の表現のこまやかさに気がついたのだ。生理的などころを挙げれば、島の部屋に一人になった時に、こみあげてくる悲しみに一瞬、おえつするシーンや髪を切るシーン。窓から見た港の風景が急に反転して、吐き気が起きるシーン。象徴的などころをあげれば、殺し屋（清水宏）を返り討ちにした時に全身が血で洗われることや、島から出ていく船を追って核爆を走るスローモーション（追う感情の奔出と追いつけない無念さが現れている。しかし結局、海を泳ぎわたって復讐を果たす）。また、みぎわの復讐は、追いつめられて起こるのではなく、ただただ夫を奪ったものに対する怒りから起こるのである。全篇を通して、彼女は「あんた」と夫を呼びつけているのであった。「個の情念の爆発」、『斬り込み』『反逆のメロディー』（共に沢田幸弘監督）のように。最後の殺りくシーンは、単なるアクションである以前に、「普通の女である」彼女の「叫び」であった。それを最初に把握できなかった僕は見たことにならなかったようである。無論、リアリズムではない。半分秒に埋まった地蔵様を石でこすって「どうぞ嵐にして下さい、どうぞ嵐にして下さい」と願をかけるとクライマックスでもものすごい嵐になる。機銃隊員が飛ばされてしまうほどの嵐の中に、みぎわは立っている。

フェアブルの『昆虫記』を読む

池田 博典

昆虫少年だったことのない僕は、これまで本で昆虫を勉強してきたのである。最初は小学生の頃、母が買ってくれた少年昆虫図鑑である。家に子供の読本がほとんど無かったので、図鑑をながめているうちに昆虫の名前を覚えた。一番、奇妙で印象に残ったのはハサミムシやマイマイカブリであった。見たことのない種の昆虫で、その気になれば部屋にいたからである。小学3年生の頃だろうか、駄菓子屋で夏になると売り出していた「昆虫採集セット」を買ってみた。500円位だったと思う。当時のひと月のつかひの全額であった。中にはメスとピンセットと昆虫針、注射器とゴム栓のしてある薬瓶二本、一本は殺虫薬でもう一本は防腐薬であった。注射器を持つと嬉しくて、そりそりした。捕虫網があったのだろう。早速、河原へ採集に出掛けた。最初に採ったのはショウリョウバッタだったと思う。注射器に殺虫薬を入れて、虫に突き刺すと、虫は口から茶色の液を少し吐いた。しばらくして防腐薬を注入するのだが、虫の体は手応えがなかった。2、3匹採集して、注射をしているうちに、僕はすっかり嫌になってしまったのである。注射すると虫は「いやいや」をするように動くのだ。いかにも可哀想であった。トンボを採って腹に針金を入れたり、バッタの腹に脱脂綿をつめたりも少しした。しかし、虫の死に隣を思い出すと気分が悪くなった。それ以来、昆虫採集を止めてしまったのである。例えば魚釣りにしても針にかかった魚がうまくはすせなくて魚の口を血だらけにしてしまい、続けられなかったことがある。しかし、昆虫の本は読んできた。北杜夫の『どくとるマンボウ昆虫記』は名作だと思うし、昆虫と縁のある小説『岩尾根にて』『餘間にて』や『阿漣のいる丘』なども好きだ。現代版昆虫記 坂上昭一『ミツハチのたどったみち』『私のマラソンとハチたち』（思索社）も素晴らしいし、伊藤嘉昭編『アメリカのロストリ』や正木伸三『昆虫の生活史と進化』（中公新書）もいい。ところが、フェアブルの本はちゃんと読んだことがないのだった。幼児の頃、絵本版フェアブルの伝記があった。200頁程度の紙の厚い簡単な本だったが、繰り返し読んだので、写真的な絵まで思い出せる。フェアブルは、小さい頃から虫が好きで、よくポケットに虫だの石だの、大人からはガラスタにしか見えないものを入れて帰ってきたという。小鳥の卵を温めたこともある。やがて昆虫の観察をするようになったが、変なことをしていると思われて警官にとかめられることもあった。最後の頁は「観察が終わると昆虫たちを必ずフェアブルは逃がしてやりました」というものだった。僕のフェアブル理解は、この絵本で尽きているのである。最近、授業に博物館を導入しようと昆虫採集に再挑戦、『フェアブルの植物記』（平凡社）と併せて、『昆虫記』も読むことにした。岩波文庫の量は膨大である。図書館であかね書房の少年少女版を借りて読むのである。これなら8巻ですむ。かえって重要な所がはっきりするだろうという魂胆である。現代日本の研究の状況も調査して、面白いものになるように努めてみたい。

『血の婚礼』を見てきました。スタッフや出演者は映画『カルメン』とほとんど変わりません。アントニオ・ガデスは相変わらず素晴らしい、そのうえ素晴らしい。ミーハー根性をさらしますと、『カルメン』のときなど、ガデスを見て、こんな腫の持ち主を、どうしてあんなに冷たくあしらうことができるのだろう。と、カルメンのカルメンであることを理解した次第でありました。

『血の婚礼』を見ていて、フラメンコの威力に圧倒されましたが、今日はフラメンコのことはひとまずおいて、別のことにします。それは「鏡」のことです。

この映画は『血の婚礼』というステージのリハーサル・シーンを撮ったものなので、リハーサル室にも楽屋にも鏡がたくさんあります。鏡に向かってメーキャップしながら自分の過去を語るガデスや、もしかしたら鏡に向かってのかもしれないダンス・シーンを観ながら、ふとバレエ『牧神の午後』を思い出しました。このバレエはジェローム・ロビンズ（『ファンシー・フリー』や『ウェストサイド物語』の振付をした人）がマラルメの詩とニジンスキーのバレエに触発されてつくった一幕の短い作品です。装置はバーが一台だけ、衣装も練習中と変わらないレオタードで男女二人がドビュッシーの『牧神の午後への前奏曲』にのせてマラルメの詩の世界を踊るのです。その時非常に重要な役割をはたすのが「鏡」です。といっても鏡が装置として登場するわけではありません。ロビンズはある作品の振付け中に、鏡の中の姿に見入っていて、パートナーと体がふれあっていることなど気付かないようにみえたダンサーを見て、この作品をつくり出したのだそうです。そこで、この『牧神の午後』というバレエでは舞台と客席の間に、一枚の大きな鏡があることを想定しました。踊る二人は鏡の中の自分の姿、相手の姿を通して出会い、不思議な恋をして、そして別れていくのです。ですから、ダンサーは特に見つめあったりせず、顔はしじゅう客席を向いていることになります。つまりダンサーも鏡を、観客も鏡を見つめることになるのです。そこで（ここが鏡の効果としておもしろいと私は思うのですが）ステージのダンサーの姿は、ふと気付くと観客自身の姿になっているのです。ですから舞台と自分との見境がつかなくなり、本当にニフの姿を見た牧神になってしまうのです。そして鏡の効果ที่สำคัญである分、ダンサーのパーソナリティーも重要なのです。こんなことを言っている批評を私は読んだことがないのですが、このバレエのすごいところはここだと私は思うのです。『白鳥の湖』のようにハデハデしい見せ場があるわけでもなく、パッと見たかぎりは動きののろい、かたがたのバレエにみえるかもしれませんが、でも本当は本物の夢幻体験のできる作品なのです。ニフが去って牧神は、これは夢だったのだろうか。と考えるながらも再びまどろんでゆき、そこで音楽が終り、バレエも終ります。その気になってまどろんでいた観客は、はっと我にかえります。マラルメの世界を舞台化するのにこれほど効果的な演出法はないのではないかと思います。うまく言えなくて悲しいのですが、観客は牧神になってしまい、そのためもあって、作品自体が牧神の見た夢幻になってしまう、という摩可不思議な世界なのです。「鏡の効果」といえばベラスケスの「ラ

ス・メーナス」も思い出されますが、あの絵をみた時に感じるままにも似たもの（ブラド美術館では、もう一枚の本物の鏡の登場でそれはすさまじい体験ができるそうですが）を感じる事ができます。全然別の時間を生きてしまうのです。この体験に、『血の婚礼』の体験は似ているのです。

こんなにすごい鏡ですが、ダンサーにとってはわずかしい相手のようです。前述のロビンスの振付けたダンサーも一歩まちかえれば、実体としての自分の存在を忘れ去ってしまうことでしょう。人は自分の姿を内側から見る事ができます。鏡を見つめつづけると、この能力を忘れるばかりか、「鏡の中の自分」になってしまうのでしょうか。それでもダンサーの場合鏡を見るのはとても必要なことなので、舞台に立つだけで、存在感のあるダンサー（めったにいませんが）など見ると、すごい！と感嘆してしまいます。存在感は鏡の問題を克服すれば、出てくるというものでもないでしょうが。

鏡のことは少々考えてみたいことのひとつです。ガブスや、花嫁をやったクリスティーナ・オジョスの舞い（彼女を見ていると『アンデルセンの魂』を思い出したりもします）それからメーキャップのことなど、他にも考えたいことはあるのですが、鏡のことを考えていたら頭の中が熱帯雨林のようになってしまったので、この辺でやめます。なお、『レエ』『牧神の午後』については、私自身一度しか見たことがないので、文中語りがあるかも知れません。

私は、日本の映画を劇場で見ることはありません。どうしても、外国語のものに、道をゆずってしまうのです。特に英語以外の言葉の映画に。英語は落筆生ながら7年間やってきたおかげで、いかにも言葉に聞こえてしましますが、他国語は、さっぱり意味がわからないので、風の音とかわりなくなってしまうのです。大学でドイツ語をとったのも、『ツリキの大鼓』の「カシュ・ワのダンツィヒ」（これは純粋なドイツ語ではありませんが）というひびきや、その後の市場のシーンがよかった、などというのが理由のひとつだったりします。これが吹き替えなんて堪えられません。

↳ ラス・メーナス

そういうわけでNHKの語学講座も時々、聴きます。わかるようになりたいわけではなく、聴いているのがたのしい。単にこれだけです。特にスペイン語が気に入っています。時々、日本語をスペイン語と同じように聴いてみたいと思います。純粋に音としての日本語を聴いてみたいのです。か、どんなに大学でも、外国語を音として聴くことはできない。と感嘆して、ますます聴きたいのです。外国語は至らぬまでも、日本語を聴いて



ひとつのカノンと「円環」 池田 博明 (京都に佐々木昭一郎作品の上映会を主催しているピッコロ・フォーams、今春の上映会用パンフレットのために)

勤務校の器楽部のレパートリーに、パッヘルベルの『カノン』が加えられた。2、3年前のことである。練習のとき、演奏会のとき、その旋律が流れてくると、いつも佐々木さんの『夢の島少女』の映像を思い出す。「これ、あたしが見つけたの」と言って、ピアノの鍵盤をひとつひとつ押さえていった少女、中尾幸世さんの音にこめた想いを感じる。これからも毎年、演奏して行ってほしいものだ。もっとも、『カノン』の演奏を器楽部に頼んだことはないし、これからも頼もうとは思わない。永遠に、そっと続けて行ってほしいのだ。ところで、「カノン」という形式の音楽では、同じ主題が少しずつ、ずれて繰り返される。ちょうど川の流れるように、絶えず繰り返されて、豊かなリズムを作り出すのである。最近、まるでその「カノン」のような経験をした。

「にじの会」という佐々木さんの作品の上映会を中心にして集まった人々の会が、東京にある。先日、初めて会に出席して、会の人々の佐々木作品との出会いを聞いているうちに、いつか時間が10年前にもどったような気がした。『四季・ユートピアノ』との出会いを語る人、『アンダルシアの虹』との出会いを語る人、その言葉は『夢の島少女』に出会った僕のそれと、まったく同じであった。その人なりの言葉で語っていた。作品は異なり、見る人の世代は異なっているのに、どうして感動を語る言葉や語りくちは同じなのだろう。無意識の深みから、時間を超えて浮かびあがってくる佐々木作品の記憶。その秘密を解く鍵が、そこにはあるのかもしれない。

『コメット・イケヤ』の全席の少女は「世界はどこで切ってもつながる円環(まる)なのだ」と言っていた。ユングは「円環は個人の全一性、“自己”を表す像だ」と書いている。傷つき、分裂した自我を統一する理想型が円環(まる)なのだ。わたしたちは円環を求めないのである。

『四季・ユートピアノ』『川』の調律師栄子はA音の音叉を持っている。A音は世界中どこでも「赤ん坊の声」だと佐々木さんは言う。その音はすべての出発点なのかもしれない。というよりも、円環なのかもしれない。アメリカで客死したジョン・レノンがこう言っていた。「ピアノでひとつの音を出すと、そこにすべてのハーモニックスがあるということ、誰でも知っていますよ」。「ハーモニックス」、美しい言葉である。ヴォネガットの『タイタンの妖女』には“ハーモニウム”という水星の歌を食べる、まるでかつてのヒッピーたちのピース・サインのような生物が登場する。調和と円環。

言葉ではなく音を、物語ではなく瞬間を、虚構(ドラマ)ではなく真実(ドキュメント)を、全体ではなく断片を、生活ではなく生命を、絶望ではなく希望を、科学ではなく芸術を、特殊ではなく普遍を、社会ではなく個人を、単純ではなく複雑を、暗里ではなく陽光を！
(1985年2月10日記)

(佐々木作品が再放送される。3月20日ラジオ第1放送夜9時5分から『おはようインディア』(原作・寺山修司)、NHK総合TV夜11時頃から『四季・ユートピアノ』)

陽は出ているのに、寒い風が吹きすさぶ2月の日曜日の2時半頃のこと、小田急相模原駅に降りると、駅前のイトーヨーカ堂そばに大きなパンダのぬいぐるみを着たくがいて、子供たちが集まっている。「森永ラブ」というハンバーガー屋さんのデトラクションであった。「パンダと対決しよう」という垂れ幕。ふたりの「森永ラブ」のお姉さん、手の数倍はある大きなサイコロ。要するにパンダとサイコロ勝負しようというのである。我が家の娘ふたりも、物好きにも、さっそく列に加わったのである。さて、まずは6歳の泉の番である。サイコロを転がすと「1」の目が出た。「これは、パンダさんの勝ちかなあ」とお姉さんが言う。ところが、パンダかぶると「1」の目であった。「やあ、同じだね。では、もう一回やりましょう」。周りの子供たちが「ガンバレ、ガンバレ」とコールする。今度は泉の目は「2」である。「これはパンダさんの勝ちだなあ」と誰もが思った。周りの子供たちはパンダ・コールに変わる。なんとパンダの目は「1」であった。泉の勝ち。続いて、4歳の千洋がパンダの前に出る。いつもは口達音で勢いのいい妹だが、緊張してパンダをじっと見つめていて、大きなサイコロを持ったままになっている。「投げてもいいんだよ」と言われてコロと転がすと「5」が出た。まさにパンダかぶると目は「2」であった。勝ったのである。ところが、（勝たなきゃいけない）と思ったからか、パンダを見つめるのに集中して、自分の目がなんだったか、考えているような具合である。「勝ったんですよ」と促されてようやく、勝ちの賞品のところに移動した。賞品は消しゴムかバッジかシャボン玉である。「ほら早く選びなさい」とせかすと、売り子嬢いわく「もう取りましたよ」。なるほど、ふたりとももうシャボン玉をにぎっていた。各々の性格に見合った勝負であった。泉はのんびり勝ち、千洋は体いっぱい緊張させて勝った。おかしなものである。子供たちはパンダの周りではしゃいでいる。時々、パンダにまどわりついたりしている。娘たちも例にもれず、後ろに抱きついたり、触ってみたいしていた。

すぐ近くに「明治サンデ・オレ」という別のハンバーガー屋さんがあるが、そこにはまったくお客さんが入っていない。後ろを歩いてきた少女たちの会話はこうである。「どうしてあっちは誰も入っていないんだろうね」「伊まってるじゃない。ますいからだヨ」。以前は、「明治」の店しかなかったので、向うも流行っていた。味は似たものである。みんなには店の新しい方がなんとなく良く思えるのではないだろうか。

用がすんで帰り、4時半頃になってもまだやっていた。ぬいぐるみの中の人はまだいいだろうが、アシスタントのミニ・スカートのお姉さんは寒からう。娘ふたりは「パンダは強いね」「そうだね」などと話している。またまた列にならんで挑戦したら、今度はふたりとも負けてしまった。負けの景品はバーガーのサービス券であった。バーガーを買った時にその券を出すとフライド・ポテトがおまけでつくというものである。「明治」の方でもサービス券を配っていた。そっちは、フライド・ポテトかシュークリームがおまけという券であった。券は記念に持ち帰ってきた。(註)

長谷川 「高校を卒業して以来、1度もお礼をさしあげず、あなたにばかりはがかりで、とても恐縮しています。(略)今日は先生に近況報告を少し書きたいと思います、昨年暮れに入院していたことは年賀状に書きましたが、実はその前の年にも入院したのです。大学4年の夏休み明けのこと、胃が腫れるように痛むため、検査をしたところ、胃の外部に胃を圧迫する腫瘍があると医者に言われびっくり。即入院して検査を繰り返すうちに腎臓に水がたまり、腫れあがったものだと判明。手術をして、腫れあがり2000ccもの水のたまった無機能の腎臓を摘出。残った右の腎臓も水腎症の症状があり、石もあるといわれ、運動は一切禁止と宣告され退院。夏休みや入院する直前までバスケットに明け暮れ、走り回っていたのがうその様でした。高校時代は山にばかり行き、大学ではバスケットと知らず知らずのうちに体に随分負担をかけていたのですね。水腎症になった原因は尿管がうまれつき細く、通りが悪いためだそうです。退院後も定期検診を続けた昨年5月、医者より6ヶ月から1年後に再度、今度は尿管を広げる手術をした方がよいと言われ大ショック。残った腎臓も悪いのだからとは言われていたものの、こんなに早く、また手術かと消沈の思いでした。10月に一代決心をし、入院。今回は腎臓の機能等、細かい検査が行われる。検査結果、機能は正常な人の1/4。腎臓に入る血管が2本あり(普通は1本なのだそうです)、そのうちの1本が尿管を圧迫している。血管はいじらず、尿管を太くする手術が必要。腎う開戒手術をするのは大変難しい、必ずしも成功するとは言えないが、かといって手術をせず、このまま放っておくと水がたまるだけだと医者に言われ、本当に迷いましたが、医者の方を信じ、手術することに・・・。4時間半に及ぶ手術、そして3週間寝たきりの安静。その後は順調に経過。2ヶ月後、無事退院。現在に至っています。運動は禁止ですので体を動かしたくてウズウズしています。3週間寝たきりの間にいろいろな事を考えました。“自分はなんて不幸なんだ、健康に働きたい”。自分を追いつめて追いつめて、悲しくなる日が多かったですね、けれど病室に同じ病棟の入院患者さんが私を毎日のように励ましに来てくれ、上を見ればきりが無い、自分の人生をいかに楽しく一日一日生きるかと、気持ちを楽に持っていこうと、話してくれたり、うれしいこともありました。手術をしたものの、尿の通りが少し良くなっただけで、水腎症はよくはなりません。一生大事にしなくてはならないのです。もうこうなってしまった以上病気と仲よく付き合っていこうと、くやむのをやめようと努力しています。健康な人には分らない、体の大事さをしみじみと実感しています。ふと、ホッパリすると、スキーに行きたい、テニスがしたいのだと、自分にできないことはかり強にうかび、できる範囲での良い趣味をもちたいと探している毎日です。体が疲れやすいのか本当にまいってしまいますもの。今は1月より週に3日だけ、ピアノを教えるに行っています。3日が精一杯ってことです。なんだかいろいろと細かく話したくてウダウダと書いてしまいました。文章がめちゃくちゃで、とても恥ずかしいのですか、一生懸命書いたつもりです(1月25日)!

「僕も学生時代に大病をしたことがあり、他人事とは思えません。激励の意味で了解を得

て紹介させていただきます)。

川本 「『男はつらいよ』についての文章、面白く読みました。僕も不平不満をいながら、結局、欠かさずこれを見ている一人です。昨日はNHKで山田洋次特集も見てしまいました。寅さんは「旅に出る人」から「柴又に帰っている人」になったような気がします。映画のなかでは旅の部分が多いほうが面白いのに、だから僕は森崎東さんの第3作がいまだにいちばん好きです。それとやはり、「惚れた女にふられる」というのは男にとってとてもつらいことなのに、最近は、それをあっさり受け入れすぎているような気がします。(「ふられる役を演じている」という感じ)。——とまあ、いいながら、大原麗子との新作も見てしまいました。

ディック論もよかったです。ブラッドベリがダメで、ディックがよいという女性——それだけ現代はSF以上にSF的になってきたのだと思います。ディックを読んでも、ブラッドベリは牧歌的にみえてしまう……。

『人魚伝説』は僕にはダメでした。水・海という豊かなイメージと、殺りくという生々しいアクションはあわないような気がしました。だって海を見ていたら、もっと人の心は豊かになってしまいませんか(2月4日)」「森崎さんの『男はつらいよ、フーテンの寅』(ヒロインは新珠三千代)は僕が映画を見始めるきっかけになった思い出の作品です。旅の宿で風邪をひいて喉湿布にマスクの寅さんで始まり、テレビの「ゆく年くる年」に映りたがる寅さん、テキ屋商売の寅さんで終わります。おいちゃんを取っ組み合いの喧嘩をするのもこれ一作。脚本には森崎さんがクレジットされていませんが、寅さんの生みの親である森崎節がよく出ています。川本さんはキネマ旬報551号増刊『山田洋次と渥美清』(1971年)に第1作から第6作までの紹介をされています。また『国文学』(学燈社)27巻11号「現代文学SFの復興」にディック論があります。」

山内 「今、ユリイカのトリュフ特集を読みはじめたところ。トップバッターの飯島耕一の始まりの文章がゾクゾクさせます。先日『プレムリン』を見てきました。冒頭の人工のセットまるだしのシーンで、アメリカは、ハリウッドは、20年前に逆戻りしたことを痛感しました。私の大嫌いなハリウッドの人工臭、アンダーグラウンドも、ニューネマも、そんなものは全く存在しなかったらしい。SF X信仰は教と金と手を組んで、プレムリンの如く、可愛いギズモから何の因果律もなく生まれ、しない放題の限りを尽くす。そんな構図ばかりが透けていました。」(タウン誌で始まった『はくしのシネマコラム“映画から遠く離れて”』第1回(トリュフについてのエッセイ)を送って下さいました。時の成熟を感じます。希望の方にはコピーを送りますので、その旨を書いて下さい)。

藤田 「『東風』の柏木さんという人の文章、その最後のところ、「世界を開く」というのに感心したりするか、これは元気なんだろうか。透明で、何の影響もない、すばらしい文章だと思う(2月14日付)」「『イメージ・フューチャー』3月号、MAGのサム・ベキンパー追悼文の描く砂漠の流れ者のイメージは素晴らしいです」

Himoko & Kiyoshi

「朝からふりつづいて居る雪は、まだ夜になっても

やみません。こんな日は一年の中でも、最も楽しい日でもあります。雪の中を凍りと歩きつづけてしまいます。英語学校の帰り道、またすっかり道草。雪はもうすっかりかくれて居るので雪とたわむれて、すっかり日が落ちてから、小さなアパートに帰って来ました。窓にかけた、半分のカーテンを開けて、落ちてくる雪をながめて、居る内に、うちのダンさんが帰って来ました！ダンさんの弟の娘が2月9日にはじめての誕生日、名前は雪といいます。つづいてすぐもう一人だそうです。こんどはどんな名前の名前にするのか、楽しみにして居ります。弟もカミさんもスキーが上手で、やっぱり冬の山が好きなんですね！今、英子さん（梨の母）の近くに住んでいます。私達もきつとバッファロー市に冬がなかったら、又すぐどこか寒い所へ行ったかもしれない。寅さんのアメリカ版も地で行ってます。12年前の懐かしいペーパーを読んで大感激して居ます。ラブリー、もらったことないけれど、寅さんのお話しはなかなか面白くて、少し斜めからも見る様になりやした！今は貧乏してますが、良い友人に思われて、元気がいつもあったかい日割過させるのが最上の幸せです。Warm wishes for a wonderful person!」（アメリカ、バッファロー市）

酒井 、「『郵便往来』を読んで、私も思わずペンをとってしまいました。（略）（ある友人の）努力には驚いてしまいます。私もこのままの生活に満足し、ずーっと流されているだけではないんですね、なんて考えさせられちゃいました。先月の28～30日に、私は会社の人と2泊3日で苗場にスキーに行ってきました。今回で2度目のスキーでしたが、しっかりスクールに入学して、ボーゲンだけはなんとかなるようになりました。最初にリフトに乗った時は、もうこわくてこわくて、何となくも、うちの会社の人ってすこくおっかないんですよ。会社の顔とは全く違ふんですから、でも、最終的にはリフトに20本くらい乗れたんです。今、苗場には、箱根のゴルフ場やホテルから（会社の）多くの人が出向に行っているのです。売店やレストランなど、いたる所で同期の子に会いました。みんな出向に来て働いているのに、きゃっきゃと遊んでいる自分たちにちょっと気がひけたけれど、“明日はわが身”というわけで、来年は私も苗場の社員かもしれません。」（東京より）。

川辺 「何号だったか、“寅さんの話の中で、妹さんのさくらさんのやさしさが良い”と言われていました。私もそう思います。実際、あの寅さんのような兄を持ったとしたら、そのようにやさしくはなれないと思いますが、でも、寅さんの人間的なところは、魅力的なのだなど、最近になって思うようになりました。自分でも価値感が変わったように思います。また、寅さんシリーズを、2作しか見ていませんので、もう少しいろいろと見てみようかなと考えています」（小田原市酒匂より。僕は初期の作品が好きです）

平田 「この所、MGMミュージカルにどっぷりひたって、のたうちまわっていたので他のことは何も考えられない。うーん、困ったもんだ。3月は近くの宮島とか、広島川とか、のんびり自転車でぐるぐるまわってみようと思ってる。宮島へ行くのは子供のころ以来で楽しみ。（2月14日付）」（『WHAT』を毎月ありがたう）。

館田 「札幌で逢っているいろいろ話していたのが10年前なのです。懐かしく読ませて頂きました。今年の札幌は、大雪でスッポリ、街が埋まっております」（札幌より）

主催者の鈴木さんにはごまかしているし、秋本君や内海さんに言えるかもしれないと思って、ヨコハマ映画祭に出かけた。12時近くに音楽堂に着いた。鈴木さんには挨拶できたが、秋本君や内海さんはまだ来ていなかった。客席を見せてもらう。12時15分から若手評論家座談会があり、秋本、田中、内海、北川、堀田、野村、小田氏が昨年の映画について話しをする。秋本、内海、野村氏は昔と変わっていないようでホッとした。北川れい子さんは批評にしる、インタビューにしる無理をしている感じがする。堀田時敏さんは思い込みで映画を見ているようだ。田中千世子さんは『お葬式』を肯定的に評価し、小田克也さんは「面白かったが、後に不愉快になった。葬儀という儀式についての批評が感じられない。ワーストワン」と否定的に評価する。僕は映画祭の数日後に『お葬式』を小田原オリオン座で見たが、評価が確定してしまったせいだろうか、面白く感じなかった。先が読めてしまうところが、物足りない。山崎努がキネマ旬報の主演男優賞で、ヨコハマ映画祭の方でも1票差で鹿賀丈史にせまっていたが、『お葬式』でみことな演技をしていたのは、山崎の要役の宮本信子の方だったようだ。

ヨコハマ映画祭の受賞式がまずまずだった。司会者のクロ（澤川クロ）が上手かった。鹿賀丈史も来ていて、ドサ健みたいな話し方をしていた。彼は熊本映画祭のために中座した。受賞者へのインタビューが、出席者が少なく盛り上がってはいなかったのが残念。客席で、中島啓介君と会った。4時に退席して、新宿の名画座ミラノへ行き、『パコ・チ・ルシア、ライブ・イン・ロンドン』『血の婚礼』を見た。

さて、ヨコハマ映画祭のみならず、森崎東監督の『ロケーション』はキネマ旬報のベスト・テン選出でも、あまり評価されていない。飯島哲夫、山根貞男がベストワンに、上野昂志がベスト2に推薦しているのが目立つ。金井俊夫、河原畑 がテンに入れている位。

『ロケーション』の唯一の欠点は登場人物（助監督）の一人に「こんな傑作をなぜ上映しない」と言わせているところかもしれない。そんないい言などころか評価できないのだともし言われるのならば、そういうものかと思う。キネマ旬報の批評は堀田氏が書いていたが、読者の映画評（内堀孝司氏）の方が良い批評をしていた。『ロケーション』は宣伝から期待されるものとは全く違う映画なのだ。ピンク映画制作現場のしみじみとした苦労話なんかではない。見るほうが、そんな粋をはめて見始めて、はぐらかされたような気がしてしまったということではないのか。ピンクの現場のしみじみとした話なら、見た限りでは、傑作という程ではないが、すでに興映で向井寛が作っている。題名を思い出した。『セックス交換・若妻の戯れ』というのだった。題名とは無関係な話である。奇怪な名画、荒井美三雄監督『女子大生失 事件・熟れた匂い』と同時上映だった。森崎さんはすでに、テレビで西村晃にピンク映画の監督を演じさせている。『田舎刑事・まはろしの特攻隊』（79年7月7日、テレビ朝日。脚本早坂暁。尾美清主演）がそれである。だいたい『ロケーション』の語りくちは、フェリーニ以上だった。現実と幻想が交錯するのではない。現実がそのまま、幻想なのだ。鈴木清順を認める人たちが、どうして森崎映画を

〈次頁 欠除〉

ラジオドラマ『おはようインディア』 池田 博明

佐々木昭一郎作品中、聞いたことのなかった『おはようインディア』が、今日3月20日(水)放送記念日にNHKラジオ第一放送で放送された(午後9時5分から9時55分まで)。もとは60分の作品を50分に再編集したものだったのが残念。60分で聞きたかった。しかし、素晴らしい作品だった。佐々木さんの作品では『都会の二つの顔』(1963年)の次の作品(1966年)である。

インドからの留学生イラ・メイタさんの声が素晴らしい。佐々木さんはイラさんと1964年に知り合ったという。ケンこと横倉健児君との最初の作品である。タイトルの後「犬、見ませんでしたか」と、いなくなったケンの犬をイラさんと二人で探すところから始まり、湯浅美二の和やかな音流がとなぎになってイラさんの日記が綴られていく。この日記は佐々木さんが書いたものだそうである。それを、イラさんは自然な調子で語っていく。音としての言葉が美しい。『都会の二つの顔』よりも積極的に音としての言葉に表れる感性が際立っている。それ以降ずっと佐々木さんのドラマに現れるテーマである。留学生たちの寮にふれて、イラさんがこう言う。「私達はちがった言葉と同じ心を持っています」。おそらく佐々木さんが書いた言葉だろう。美しい言葉、美しい響き。

ケンが耳をさわる。「耳にさわられたとき、私はびっくりしました。耳にさわられたのは生まれて初めてだったのです」とイラさんが言う。声に現れてくる情感が素晴らしい。授業を持っているクラスの生徒たちに放送のことを知らせたのだが、果たして何人の生徒が聞いてくれただろうか。こんなにも美しい作品なのに。

佐々木さんは歌うたいは人を和ませる商売といった後で、こう言っている。「叫べば叫ぶほど、本質っていうのは飛んでいくと思う」と(『創ること』より)。『四季・ユートピアノ』『川の流れるはバイオリンの音』に出てきたイタリアのことわざ、「静かに行く人は、遠くへ行く」。

『おはようインディア』では、イラさんがケンにインドの言葉や、歌を教えるところがとてもいい。『夢の島少女』の感動的な一場面、お婆さんに小夜子が歌を教えるところにつながっていたのだ。『おはようインディア』には、『マザー』『さすらい』『夢の島少女』『四季・ユートピアノ』『川』の原型がはっきり出ている。私信で佐々木さんは『おはようインディア』を「楽しい作品」と言っていた。何度でも聞いてみたい本当に楽しい作品である。テープに録音したので、時々聞くことが出来る。おはよう、インディア。ナマステ、ヒンドスタン。今日はこれからテレビで『四季・ユートピアノ A Dream In Different Key』も見るのである。(1985年3月20日記)

『四季・ユートピアノ』に栄子の友達としてインド人の「メイタさんがインドに帰ることになった」という場面があった。栄子にサリーを着せていた。イラさんは日本で洋裁と

和裁をやっていたそうである。『四季・ユートピアノ』のクレジットでは「メイタ」というのは役名で、ほんとのイラさんではなかった。それほど『おはようインディア』のイラさんが佐々木さんの心に残っているのだ。20日に放送された『四季・ユートピアノ』は100分版（国際版）である。最初に日本で放送されたもの（90分版）に何場面か、挿入されている。『創ること』『ドラマ』に載せられている脚本は国際版である。挿入された場面は、例えば宮さんと栄子のチャップリンの辺りの話と写真家ケンと栄子の海辺の場面。海辺の場面は『夢の島少女』再びの感じだった。『夢の島少女』の主役は、この横倉健児さんと中尾幸世さんだったのである。（21日記）。

『おはようインディア』『四季・ユートピアノ』 山内

さて、柏木さんの文章ですが、今回も、見えない鏡の存在を書かれていて、敬服しました。さらに、音として日本語を聞くことも！

20日夜、ラジオで『おはようインディア』を聞きました。これが、19年前の作品とは思えないくらい。迷い犬を探しながら、未知の人と交わすことばの多様な色、背景のさまざまななたち。ケンチャンとインド女性の会話のおもしろさ。知りあってわかれて、また会って…。その連環と、インド女性のナチュラルな性質、ケンチャンの詩人ぶり。あっという間の50分でした。佐々木さんははなから佐々木さんでした。

それから夜。

『四季・ユートピアノ』はこれで何回目だろう。今回は眠くて最後まで見られなかったけれど、A子の「生いたちの記」の部分で、その極力説明を排した描き方に納得した。おそらく、自身の記憶を人に語るとすれば、断片的になってしまうと思う。その断片の喚起する力を見ていて感じた。それから、後の『川』シリーズを見ているので、このドラマの湿度が高そうな画面に改めて感心した。水分に包まれた作品！こんなにも日本人は湿気に包まれている。（私信より。3月21日記）

地学分野と物理分野の授業を終えて 池田 博明

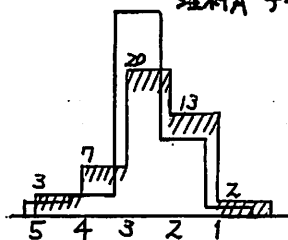
今年度初めて、「理科I」の中の地学分野と物理分野を教えた。高校時代の記憶はほとんどない。高校の物理の時間は教科書を声にするだけの授業だったので、たいてい居眠りをしていた。きちんと理解していなかったので、かえって大いに勉強になった。教えでもしなければ、復習しようなどと思わなかったろう。地学は内田智雄先生（その講義ノートを稲葉茂代さんから借りた）、物理は岩本雅之先生に指導していただいて、なんとか役目を果たした。担当したのは一クラスだけであったが、毎週授業するのが楽しみであった。なんにせよ新しいことというのはスリルがある。最後の時間に生徒に5段階評価をもらった。仮説実験授業の場合には理解度（「⑤よく分かった」「④まあまあ」「③普通」「②よく分からなかった」「①全然分からなかった」）の他に、「楽しさ」の評価をするのだがここではそれについては聞かないで、「⑤大変興味を持った」「④まあまあ」「③

普通」「②あまり興味を持ってない」「①全然興味を持ってない」という評価にした。実はこのクラスは2年になってからの理科の選択で「物理」「地学」を選択した者がひとりもないので、その辺が興味とどのくらい関係があるのか、知りたかったのである。その結果は理解度の評価平均が2.93、興味の度合の評価平均が2.81。「3（普通）」以下の結果であった。よく分からず、興味も持てなかったという悲惨なものである。まだまだ未熟である。

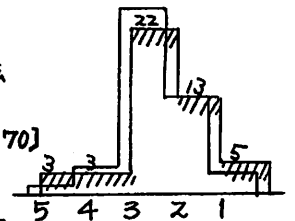
評価を整理してみても思わぬことに気がつく。教えていた方としては地学の方が面白く、物理の方は計算問題の解き方中心で、いまひとつの感じがしていたのだが、生徒の評価はむしろ反対であった。物理の方がよく分かったというのである。次のような感想にその原因が表れているだろう。「黒板の字をうつすのが大変で、説明があまりわからなかったりした。地学より物理の方が興味があったし、わかった」(地学は黒板をノートするのが大変だったようだ)。「物理の方は地学に比べると少しはわかったような気がします。先生はまじめに教えてくれてよかったです。たまには面白い話もして下さい」「予備知識がな

理科A テーマ別 評価統計

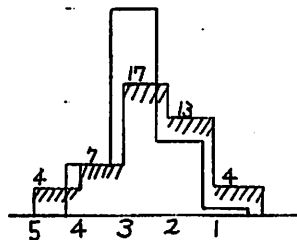
1. 地球の形
2.88 [2.91]



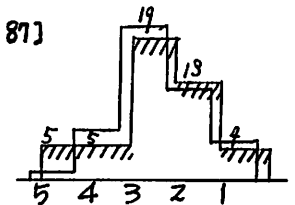
3. 地球の自転と公転
2.72 [2.70]



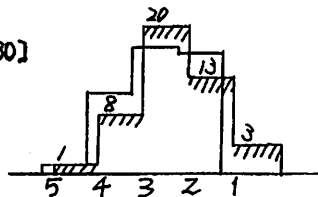
2. 地殻の構成物と地表の変化
2.89 [2.87]



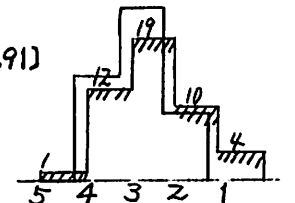
4. 惑星と恒星
2.71 [2.87]



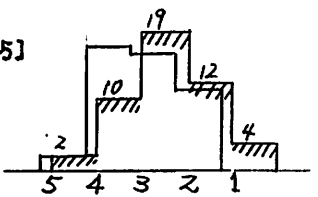
5. カと運動
2.95 [2.80]



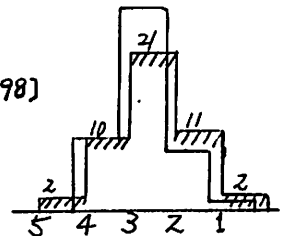
7. 熱と仕事
3.11 [2.91]



6. 仕事とエネルギー
3.20 [2.45]



8. 地球と熱
3.00 [2.98]



理解度 [興味の度合] の平均 [興味の度合] の平均

理解度 興味の度合
5. 大変良く 4. まあまあ 3. 普通 2. あまりない 1. 全然

いと全然わからない所があった。地学の方は板書が忙しく、あまり理解できなかった。先生の話し方は、ヒジョーに特徴があって面白いです。あのLHR以外にはあまり御自分のことをお話にならないので、もっと授業内容以外の話もして欲しかったです。とってもし生懸命教えて下さっているのがよく伝わりました」〔授業中には関係のない話はしないつもり〕。「とにかく説明が早い。自分が納得したなと思うと、先生ははるか遠くの話をしているのです。だから授業中は眠くなる一方です。とにかく先生が熱心に教えてくれたにもかかわらず、惑星と恒星は全然わかりませんでした」「地学の天文の意味はめちゃくちゃわかりませんでした。物理は案外好きで、先生が説明するとよくわかったんだけど自分でやると全然ダメ。それでも何とかテストはできたと思ったけれど、思わぬ感ちがいで15点も損をしたことがありました。授業は面白かったと思うので、これからも今まで通り教えて下さい」「先生はいかにも単純な教科だと思わせるように授業をするけれど、私のように理科が苦手な者にとってはすごいイヤミに聞こえることもありました。理解する間もなく、次々と進むハードさにもついていけませんでしたが、先生の人柄のおかげで授業はとにかく聞こうという心構えもできて、よかったです」〔生徒の考える時間が大切である。物理は比較的ゆっくり進んだ〕。「物理はとくに苦手な嫌いだ。高校へ来て、もっと嫌いになったけれど、最後の方の力と運動からは自分から問題を解こうと思って、やったら理解できて、解けた時などはとても嬉しくて、それから理Aも、好きとは言えないけれど、わりと好きになりました」「苦手なのでテストの結果はいつも悪かったのですが(勉強もしなかった)、物理の分野では式を覚えて問題がひとつでも解けると、とても嬉しくて、理解できると本当に面白いなあと感じました」「先生は楽しい人ですよ。それに熱心に教えてくれたにもかかわらず、私は理Aという科目が好きではありませんでした」〔こちらの熱心さだけで、なんとかもっているという感じ〕。

実験について。「実験が楽しかったです」「説明がとても親切だったので結構理解できました。実験の時はとても楽しかったです。実験が成功したときは気分は最高。授業中のちょっとした余談も楽しかったです。等速運動のときの水の実験がすごくきれいでした」「テニス・ボールに砂をつめて100回 上から一定に落とした実験が印象に残った」「実験で砂を入れたボールを何回も落としたこと」。最初の時間に大きな気球を使って『地球』をやった。「印象に残った授業は風船を使って地球の大きさについてやったのと、こうもりがさに紙をはりつけた天球がすごくきれいだった」「一番最初の授業で先生が大きな風船をふくらましてやった授業で、ああ面白そうだなと思って理科Aが好きになりました。テストは×だけど」「風船をふくらましたのが印象に残っている」「始めの方で大きな風船をふくらませてやったのが面白かった」「星の観察の時、傘にシールを貼るのを手伝いに行ったらアイスを御馳走して下さいありがとうございました」

「もう少し大きく声を出してください」「子守歌のように聞こえてついつい。実験はとても楽しくて、実験だい好き」〔数通あり。眠くなるという〕

LHRに招かれて話をしに一度行った。「LHRの時、話してくれたことがとっても面

白くて印象に残ってます」(10通ほど。囃家にでも転身するか)。「先生の第一印象はもうお聞きになったら2度と立ち直れないだろうと思うほどヒサンなのですが、受講していくにつれて、時間がくるのが待ちどおしいとなりました。はっきり言って物理や地学は嫌いですし、ニガテです。ですから授業態度はひどかったと思います。しかし、たとえ寝ていても、先生の学生時代のお話とかになりますときちんと聞いていたつもりです。これからは更に組織にとけこまず、“異色”でいらして下さい」「先生が面白いし、授業を楽しくうけた」「先生のやることって面白くって寝てられないんです。みんなも笑ってるし。これからも頑張って“先生して”下さい」(一体、何が異色で何が面白いのか、分からないなあ)。

森崎東と野呂重雄 池田 博明

森崎東監督の『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』を公開前に東宝本社試写室で見た。映画書房の野原藍さんが試写状を送って下さったのである。試写室に野村正昭君も来ていた。

森崎さんの『党宣言』で、まずハットしたのは横町の露地を通して非行少年たちが逃走する車を把えるショットである。生活品が溢れている横町の縁側にはお婆さんが坐っている。車は突っ走って行くが、お婆さんはただ坐っているだけである。そこには切白した情感は無い。ただ静かな時間がある。なぜ森崎さんは、走る車をこのような視点から撮るのか。それは森崎さん自身の「生活」へのこだわりなのである。非常の事件を撮りながら、けっしてそれだけで完結してしまわない森崎さんの語り口がある。

川本三郎さんは「街を恋する」『東京できごと史1945~1985』にこう書く。60年代の東京を代表する町が新宿であり、70年代を代表する町は渋谷である。新宿が路地裏の集積体としての有機的な町であるのに対し、渋谷はファッション・ビルを中心とした書き割りの無機質な町である。新宿は安酒場、タバコの煙がたちこめる地下のジャズ喫茶、やくざ映画を上映しているオールナイト映画館で代表される“情念”の町、男たちの町である。渋谷は表層的で明るいポスト戦後的な町、女たちの町である。しかし、60年代の新宿の悪場所が最高だったとは思わない。そこにあったのは自立した個人のさわやかな孤独ではなかった。旧制高校的なベタベタした泣き上戸的コミュニケーションだった。都市自体がソフィスティケートされた今、われわれは、ひとりできっちりと都市と遊べるだけの内面的充実さを持たなければならないだろう。いろんな所で、川本さんは繰り返し書いている。過去(例えば60年代)を神話化する精神は怠惰である、いい気なセンチメンタリズムだと。60~70年代にハイ・ティーンだった自分には痛烈な言葉である。23歳になった頃、それまで読んだ本の記録や日記を読み返してみても、驚いたことがある。16~20歳までの経験が、自分の精神の基盤を作ってしまったことが分ったからである。20歳以降の経験は、それ以前に比べると、わずかな修飾でしかなかった。現在でも、そ

の枠を超えることができない。それを自覚することが自分にとっての真実である。

どのような語り口が可能だろうか。森崎さんの憧憬する町は「新宿芸能社」があった新宿の花園町に代表される路地裏である。この映画にも魅力的な路地裏が登場する。というよりも、全篇「路地裏」の物語のようである。敦賀の町は日本のひとつの路地裏のようである。原子力発電は最先端の技術であるはずなのに、ちょうど『喜劇・街の灯』で映し出された九州のボタ山のように、佐世保のコンビナートのように、発電所は禍々しい人工物である。森崎さんは『ロケーション』で一人の少女の人生に深入りしていく人々を描いたのと同じように、他人の人生に深入りしていく「人間たち」を描いていく。

上原由恵（アイコ）は、これまで知り合った人々の名前を一人一人挙げる。竹本幸恵（タマ枝）が砂の上に「正」の字を書いて数えていくと千四百三十七人。彼女はそんなにも人との出会いを記憶に留めているのだった。感動的なキャラクターである。

象徴的でもなく、比喩的でもない場面がかえっていきいきしている。例えば小林トシエ（タケ子）がタマ枝のお茶漬をバーンとはじきとばすところ、タマ枝が平然とつづいてお茶漬を作るところ、倍賞美津子（バーバラ）が旅先を巡るところ、原田芳雄（宮里）の原発ジブシー相手に博打をしながらの話、辻伊万里（タネ）婆さんの祈り、乱孝寿（ギン子）がバーバラを諭すところ（「人助けしようなんぞという芝居がかった主義は今時はやらんで。はやるんはな、四角なテレビの中だけや、浮わつた考え捨てんと生きていかれへんで今日び」。せっかくの忠告を無視して、バーバラは「浮わつた考え」の方につくのである）、握り飯百個などなど。

さて、神奈川高教組のブックレットNo.1は、なんと森崎さんの映画の引金になった『天国遊び』の著者、野呂重雄さんの講演の記録『子供たちの絶望と希望』であった。これが大変に面白いものである。要約してみよう。まず、「問題群としての『子供』」という把握をする。そういう用語は使っていないが、要するに現代社会の矛盾が子供、非行少年に現れているという把握である。貧困が非行の原因ではなく、精神的空虚感、無気力が拡大している。生理的なレベルで生き抜く力が落ちていて、つっぱり連中もよくしゃがんでいるし、「むかつく」「かったるい」という生理的な用語で自分の心理を表現する。大学生でも自殺者が増えている。社会に能力主義がはびこり、「民主主義」は教員の心ふるえる理想ではなくなった。子供たちは教師のまなざしの前で自分の人生の絶対性を確信できなくなる。比較される。比較は企業の論理である。企業はランクをつけ、定価をつける。学校は生活の場ではなく、勉強の場になった。昔は学校は遊園地や公園や博物館、図書館に近かった。今は少年院や軍隊、刑務所に近い。「人生を愛する」能力を持っていたはずの母親、すべてを肯定してくれるはずだった母親さえ「頭の悪い子は愛せなくなりますね」などと言うようになった。親自身が子供に人生を教えず、消費的に生きている。家庭も母親も父親も崩壊している。しかし、糸井重里の『ヘンタイよい子新聞』（“変態”でも“せいじょうよい子”でもない）のようなパロディを楽しむ子供たちの批評群辭解に希望をつなげるのではないか。白けはファシズムにもつながる道だとはいうものの。

要約してしまうと、月並みな感じがしてしまうが、もとの講演は具体例が豊富で、それだけでも面白いのである。「きもちいい編」の投書にこんながあるという。「きもちいいというのは何かというと、それはNHKの体操のおねえさんです。あの方達は人生の基本です。足を直角に曲げて背をびんと伸ばして、大きくなったらあの方のような真直ぐな人間になりたい」。笑える（ちなみに、『ペンギニストは眠らない』は傑作である。糸井重里の仕事では矢沢栄吉の聞き書き『成りあがり』と双壁だろう。どちらも角川文庫に収録されている）。比較してみるのにはいい別の時代の投書がある。さしずめ「よい子編」である。「僕は大東亜戦争が始まってからずいぶんいい子になりました。今まで家中で一番朝ねぼうで、おこされても一ぺんではなかなかおきないでしかられたりしたけれど、そんな弱虫ぢゃいけなと思って、毎ばんめざまし時計をかけて六時半にはきっとおきることにしました」。これは戦争中の雑誌に採用された子供の投書である（『昭和大雑誌 戦中編』流通出版）。同じような内容でも、状況が違えばまったく意味が変わってくるよい例である。講演にはこんな例もある。昭和45年、学園紛争当時は京大生の自殺者は一人だったが、鎮圧された翌年には4人、その次は8人、現在はほとんどコンスタントに10人前後だとか、京大の入学生の40%は神経科に来るとか、森崎映画の題名に「死んだらそれまでよ」とあることと併せて考えると、二人の共通項が見えてくる。ツッパリたちよ人間たちよ、生き抜く力を獲得せよと呼びかけているようだ。身体的、生理的なレベルでの生き抜く力を獲得せよと。アイ子と泉谷しげる（安次）が作った二人の合言葉「あふれる若さ、みなぎる情熱、協同一致団結、ファイト！」が、切なくひびく時代である。果天的なアイちゃんのアイサツの言葉「アイちゃんですよーっ、ご飯食べたぁ」が、奇妙にひびく時代である。これらの、いわばメッセージは現代の状況の中においてみると、とても時代錯誤的にひびく。題名になっている「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ」という言葉は、文化大革命に旗上げた紅衛兵の小さな党であるという。今時、文化大革命なんて甚だしい時代錯誤ではないか。そういえば、森崎さんの映画はいつも「時代錯誤」である。『党宣言』も、難解ではないのに、ちっともドラマらしくない。中心のない映画である。ひとつひとつのエピソードは劇的なのだが、全体としてみると、『女売り出します』や『女生きてます』のように盛り上がりはかない。複雑な謎が最後で一気に氷解する『ロケーション』のようなカタルシスがあるわけでもない。エンドレス・テープのように、始まりも終わりもない。映画は終わっても、バーバラの旅のように、ふたたび新しい宮里やアイ子や安次が現れてくるのだらうと思える。語りを放棄してしまった映画である。例えばアカデミー賞を独占した感のある『アマデウス』と比べてみる。『アマデウス』では「語り」の面白さが劇をひっぱっていく。だが、見て終わると、だまされたような感じがして不満が残ってしまう。「語り」に載せられた自分自身に腰を立てているのだらう。他人の神経を逆なでするモーツァルトの笑い声が一番印象に残ってしまったりする。面白かったが、もう一度見ようとは思わない。『党宣言』は、『黒木太郎の愛と冒険』がそうだったように、もう一度見たい、いとおいしい映画である。（85.3.30）

郵 便 往 来

片寄 「何時も楽しく読ませて貰ってます。良きMy Home Papaを目指して頑張ってます。同居人なんぞはすっかり横浜映画祭のファンになってしまって、三年連続で通ってます。最近、耳にした面白い話。我家の近くの中学は教育熱心でレベルも高いとの事。入学説明会で“当校はレベルが高いので塾には必ず行かせて下さい。そうしないと授業にはついて来れません”。栄光学園では塾なんか行くなと言うのにほとんどが行くそうです。仕事にあぶれたら塾の先生でもやりますか（3月19日）」（藤沢市より。今年は僕も横浜映画祭に行きました。3月23日付けの『朝日新聞』には、埼玉県東浦和中学校で、学級担任が教室に高校へ提出する調査書を置き忘れ、生徒が内申点と通知表の評価が違っているのを知って騒ぎになったという記事が出ていた。生徒が明け正したら、或る教師は「教師も人間だから感情で内申点をつけることもある」と言ったという（校長の説明。同じことが生徒の方の説明によると「内申点は好き嫌いでつける。内申点をよくしてほしければ、なぜ教師におべっかを使わないのだ」と発言したという報道である）。どちらに理があるかは一目瞭然である。内申書重視は最悪である。しかし、世の中はその方向へ動いている。大学もそうである。内申書重視を推進し、入学試験一本槍の入試地獄を批判してきたのは世間であり、教員であった。いまや内申書地獄であり、入試地獄よりもっと悪い。今、その当時、内申書重視を歓迎した人々は何というだろうか。無論、入学試験そのものだけの改革が事態を悪化させてきたのだというであろう。社会制度等の根本的な所が改善されなかったのだからと。言っているだけですむ人は幸せである）。

西井 「いつもミニコミをありがとうございます。たいへん勇気づけられる内容で、再度がんばろうと思うのですが（後略）（3月19日）」（二宮高校より。修学旅行の記録を送っていただきました。ありがとうございます）。


















村上 「黄昏通信をまた発行することにしました（後略）」（GYAさんのミニコミが復活しました。編集からコピーから発送まで、ひとりでやっているGYAさんを想像して読んでいます。もっとも僕もひとりでやっていますが、今号の『黄昏通信ふたたび』より「もう10年以上まえ、ぼくがまだ大学生で『キネ旬』の愛読者だった頃、映画ファンの愉しみを教えてくれたのは山田宏一さんや川本三郎さん、文芸座オールナイトの常連だった秋本鉄ちゃんや内海ルーシー、大森DOC一樹や藤田MAO、平田YAS、池田YOTAさんといった仲間たちだった。みんな評論家であったり、編集者であったり、監督になったり、ミニコミを出しつづけてたり、いろんな形で映画に関わりつづけ、映画ファンでありつづけているわけだけど、10年以上の間に変わってしまったものも大きいような気がしていた。でもこの本（『シネ・ブラボー』）を読んで、変わらないもののほうが、もっともっと大きいのだと、自信を持って言えるような気がする」。GYAさんのこの部分を読んだ時、MAO（藤田真男）の手紙の一節を思い出した。「世代というのがなくても押井（守）さんの言う世代的な「確信」というのはあると思う。そういう確信を持たない人に、世代なんてものは一などと言われると腹が立つ（2月14日）」）。


平田 「昆虫記ねえ。読んだことない。今の所、司馬さんの小説『電馬がいく』と『狹が如く』だけで18冊も本棚にならんでるし、あとなんやかんやで40冊近く読んでない本を買って、なかなか本を読むのも大変だ。アントニオ・ガ德斯、うーん、見ない。しかし、『東風』の読者は多いなあ。『WHAT』なんて6人だもの！ハハハ、読者も減っていつつぶれる日も近い。．．とか。サッポロにいた頃、ラーメン、食べた？どこで食べたか、記憶があれば教えて。もう古い話だから忘れたかな。映画は『ベスト・キッド』を見た。ウェスタンの味がした。『モンタナの西』とか『リオ・グランデの砦』でありますな（3月22日）」〔『東風』は担任したクラス中心に卒業生の希望者にあげているので増えた。もっとも去年は、ほとんど希望がなかった。4月から1年生の担任なので、郵便で送っている方々には、担任した生徒に配布しているのと同じ学級通信『スピニング・ホイール307』を送ることにします。同僚の方で興味のある方は教室で見てください。『東風』は稀に発行します。YASの『WHAT』は現在27号。僕は送っていたけどミニコミの持ちはいい方なのだが、『WHAT』に限らず、欠号が結構あるのがYASのミニコミ。時々、送られて来ないことがある。全号、持っている人はすごい。『WHAT』27号の『カポネ大いに泣く』と教育テレビの『人類の起原』に関するエッセーは特筆！ラーメンの特集もある。札幌のラーメンは名前だけで高いし、うまくない。思い出といっても、ワンダー・フォーゲル部がよく行っていた飲み屋で飲んだ後、屋台で食べた特においしいラーメン位。今の所、城内高校の隣の「こぼやし」のラーメンが最高の味だ。家族を連れていったら、女房はなんと野菜のため定食なんか注文するんだよね。ラーメンを注文しろって言っているのに。不思議な人である。城内高校放送委員会制作のラーメンにまつわる奇作『飾り話「えさ処」』をYASに送ります〕。

内海 「柏木 さんの『血の婚礼』と『牧神の午後』の文章を読むと、こういうていねいなものを書かせてしまう（！）池田さんの力に改めて呆れてしまいます。ホント、タチがちがうとはいえ、こんなに静かにミニコミやる人だとは正直思っていなかった。．．．わけではないけど。まあ、体にさわらない程度にラクに続けていって下さい。私もお返事ぐらいしようと思いますので。〔中略〕山内 さんが、タウン誌にシネマコラムを始められたとのこと、「時の成熟を感じます」というYOTAの言い方にググッと感じます。コピーを送って下さい。最近の映画では『ターミネーター』と『ビバリーヒルズコップ』が好きです（3月25日）」〔柏木さんは在学中から考察が多角的でした〕

佐藤 「今年、我家の木蓮が例年になくよくつぼみをつけています。きつと影を作っていて、木を切ったせいでしょう。切られた方には気の毒ですが、満々と咲くよその木蓮を横目で見ているの事を思うとうきうきしてきます。〔中略〕先日、六本木まで、『ミツバチのささやき』を観に行ってきました。30分前に着いたのですが、平日12時30分の上映にもかかわらず、列ができていました。前売りを持っていたのですがすぐに入れたのですが、それでも整理番号が100番台でした。印象に残ったのは姉妹で小屋まで駆けて行くシーンと、きのこをつぶすシーンです。何故だかよくわかりません。映画の

影響かどうかわかりませんが、最近、スペインの歴史、風土等の本を続けて4冊、読みました。その中で面白かったのが堀田善衛氏の『スペイン断章』です。「歴史」の意味について考えることができたような気がしています。活字になった歴史を読む、それだけではなく、日常の中で当然という顔をして存在している「歴史」、形として見えなくても、人によって長くたもたれてきたもの、そういうものをより感じる事が大切なのだなあと思います」(小田原市より。コンピューターを使った集団遺伝学の教育プログラムを検討してくれています。市販されているマニュアルには専門家でも分らない代物があるそうで、けっして分からない方が馬鹿ではないそうです。僕も休日2月10日に『ハリーの災難』(新宿東映ホール)、『ミツバチのささやき』(六本木シネ・ヴィヴァン。六本木は十三年ぶりだった。映画ファンの“团长”伊藤勝男さんの店、“スピーク・ロウ”でPHCのみんなと会って以来である)、『カルメン』(キネカ大森)とハシゴをした。『ミツバチのささやき』は2時45分からの回で、1時30分に整理番号が158番、2時7分には係の人が「2時の回は満席になりました」と言っていた。美しい映画である)

望月：「また、ヤギの赤ちゃんが生まれました。ヤギの目は、

さて、どれでしょう。先生、知ってますよね。：伊勢台書店でバイトしています。(略)セラーの社員の人数などは5000円の予算のお客さまが来たら8000円売ってしまっているんですが、それじゃあ、ぜったいお客さんの方に少しばかりの後悔が残ると思うんです。だからつい、ちょーど5000円か、でなかったら4000円くらいにおさまるようなものを勧めちゃって。商人には失格なのかな。でも浮いたお金でケーキかってあげよとかって、あと味よく帰ってほしいって気がするのです。(略)今、伊勢台で文具を1000円以上買うと、小学生以下ならば大玉のあめのつかみどりができるのです。2日づつけてやってきて、19こ、24こ信じられないしごとさと大きすぎて、とってく子もあれば「とれるだけとってね」って言っているのに、1つとか2つだけとって、お母さんに、もっととってほしいのよって言われて「これでいいの」って言ってく子もいます。4、5ことって満足しちゃってお母さんと妹と分けて帰っていく子なんて、かわいいです。いろいろいるもんです。おもしろい(3月29日)」(ヤギの目は  だそうです。「土地に根づいた獣医さんになりたい」という理想を是非かなえて下さい)

学級通信『スピニング・ホイール』1~48号(1977~80年)、『スピニング・ホイール151』1~42号(1981~84年)の合冊版(ただまとめただけのもの)を各々3部と5部作りました。希望の方は送料(各々について350円。切手で結構です)を送って下さい。尚、学級通信及び『学校~東風』の希望の号がある方は、その旨連絡して下さい。若干在庫があります。1974年製作『女優・夏純子特集』も、在庫があります。希望の方はその旨、連絡して下さい(こちらの方は送料が240円です)。

千国安之輔先生とユキノシタ

池田 博明

7月27日(土)から29日(月)まで、安曇野で東京クモ談話会の合宿があった。安曇野には、千国安之輔氏が住む。千国氏を知ったのは5年前である。八王子の私学会館で行われた東亜クモ学会大会の一般講演で、氏は素晴らしいナガコガネグモの卵のうのスライド写真を使ってファブルの観察の誤りを指摘されたのである。雑誌『アニマ』に掲載されていたナガコガネグモの写真をすでに見ていた僕にも、魅力的な講演であった。ほどなく、偕成社から「観察の本」「クモの親と子」が出版された。見事なナチュラルリストの目で書かれていた。ムラクモヒシガタグモの調査をして論文を書いたところ、氏から御手紙が来た。生きた標本を是非送ってほしいということであった。お送りしたところ、丁寧な返事と著書を送って下さった。「クモたちの狩り(上)(下)」「クモの一生」「ウドンゲとアリジゴク」と著書は続いた。実は最初の「観察の本」「オトシジミ」はサンケイ児童出版文化大賞を受賞していたのである。

2年前の別府で行われたクモ学会大会の懇親会の後では、酒が入って弁舌ますますさわやかになった千国氏の勢いで、6畳に30名以上が集められたのである。不思議な人である。同じ長野の教育者で小松敏宏氏がいる。千国氏は岸田久吉先生は小松氏を好かれ、僕は嫌われたんだという。しかし、その語り口にうらみがましいところは微塵もない。それでも、と氏は話す。面白いクモ5種をアクタに投稿したところ、岸田先生がうーんと言って原色図版で載せてくれたという。後にも先にもアクタに原色図版が載ったのはこの時だけである。当時は法外なお金がかかったはずだ。小規模な学会にそれだけの資金があるはずもない。それは全部岸田先生のお金から出たに相違ない。植村先生、八木沼先生の手を経て、岸田先生に標本を見ていただき、またその標本を両先生の手を経て、返していただく日の物語も含めて、過去の経緯の物語は、「古典落語」である。今度の合宿でも聞いて、別府、千葉と続いて3回目なのだが、いつ聞いても楽しく笑える。

始めどの出版社も『オトシジミ』の出版をしてくれなかったという。本は子供たちがおじいさんと一緒に少しずつ、オトシジミの謎をといいていくというかたちになっている。具体的な観察、ひとつひとつの事実から、次の観察を考え、推理を積み重ねていくという手順が書かれている。「こんなくどいものを」誰が読みますか、というわけだ。結局、偕成社の部長判断で出版したのだが、その年の大賞に輝いて、面目を果たした。それで、ずっと他の出版社からの要請を断って、偕成社から出しているのだという。チョウヤセミの本も書いているという。日本のファブルの一人と言ってよいだろう。

東京クモ談話会ではずっと以前、長野で合宿を計画したが、途中の自動車事故で頓挫してしまい、宿を予約したり、手配をして下さった氏に大変な迷惑をかけたのだという。今回はそのときの名誉ばん回という意味もあったようだ。20数人も参加があって本当によかったと、企画の熊田憲一氏も千国氏も言っておられた。

さて、植物にも動物にもくわしい千国氏に学ぶという思い出を、わが家のふたりの娘に作ってやりたかった。宿の周りにある草をつんで、「なんという草だろうね。先生に聞いておいで」と促すと、「なんて聞けばいいの」と言う。「先生、これ何ですかって聞くんだよ」と話すと、ふたりで争って駆けていって、草を氏の目の前に突き出し、「先生、これ何ですか」と聞いている。勿論、教えて下さった。戻ってきた娘たちは「おとうさん、コマツナギだって」と報告してくれる。次にはもう、なにか見つけると「先生に聞いてくる」と言って、持っていくようになった。うるさがることもなく答えて下さる氏に感謝感激である。そんなことをしているうちに、あることに気がついた。氏の答え方である。子供が持っていくと、まず氏は「うーん、これはね」とか「ほほう、これは」とか言われるのである。つまり、そぶりで(いやあ、お嬢ちゃん、これはいいものを見つけてきたね)という驚きを示されるのである。すぐに答えないのである。そして、いわば「勿体をつけて」ゆっくり教えて下さるのだ。万願寺の木の幹にユキノシタが生えていた。娘が「なんだろう、これは」と言うから、「ユキノシタだよ」と教えてあげたのだが、「先生に聞いてみる」と持っていく。氏はユキノシタを見て、「ほほう、これはこれは。うーん、大きいという漢字を知っているかな。知っているね。大きいという漢字は他になんて読み方を

するかな(間)。そうだね、ダイと読む。よく知っているね。この花は、ほら、見てごらん、そのダイという漢字によく似ているだろう。だから、ダイヤモンドソウと言うのだ。わかったかな。普通は、ユキノシタというんだけど」と、こんなふうで答えるのである。なるほど、氏の著書の素晴らしさを改めて感じたように思った。そしてまた、ナチュラルリストとはどうあるべきかがわかったような気がしたのである。

郵便往来

内海 「森崎さんの『党宣言』に関する文章、「全篇『路地裏』の物語のようである」とおっしゃるのに同感。さすが長年のファンは考察がきめ細かくあたたかい。この文章もちろん森崎さんの元へ届いているんでしょうね。監督はシアワセだと思います。それで思い出しましたが、2月の半ば頃、あの『人魚伝説』の池田敏春さんを囲んで秋本鉄ちゃんたちと飲んだのですが、その席で池田氏がしきりに「映画評論家」のあるべき姿について語るのです。もっとアマチュアであっていいんじゃないか、前作との比較やカメラワークやら演出法などについて書くことより(そんなものならオレの方がうまい。もっと監督に向かって書いてくれ)、観客個人の人生を語れ、そのことで読み手を映画へ向かわせる、というような内容でした。これこそ、山田宏一さんが力説していらっしやることだと思いつつ、「私は編集者に向かって書いてるの」と、とりあえず書いておきました。私は映画監督に向かって書いてはいないなあ、と改めて実感。編集者=仲間なのかもしれません。ちょっとシリメツレツになりました。今日はこの辺で(4月6日)」。〔森崎さんには送っていません。山田宏一さんの『シネ・ブラボー』(ケイブンシャ文庫)の一節を思い出した。「私は生き永らえ、いまなお、映画にこだわりつづけている。それほど、映画はおもしろいかなどと訊かれたら、映画ファンとしては、人生はおもしろいかとまともに問われたのと同じくらいの戸惑いを感じざるを得ない。人生がおもしろいのではない、人生をおもしろくしなければ生きる甲斐がないとしか言いようがないではないか、と」。この「人生をおもしろくしなければ」という所が辛い。映画ファンは映画をおもしろくしなければならぬという快樂的な義務を負っているのだという言葉がうづく。考えさせられる。6月2日に有楽シネマに『党宣言』を見に出かけたところ、もう終わっていて、次の番組になっていた。どうも客足は悪かったようである。がっかりする。〕

「『SPINNING WHEEL 307』いただきました。即興のお話、ガンバってますねえ。「おとうさん、ホームズと同じだね」といわれちゃうと苦しいとこでしょうね。めげずに続けてくださいまし。『ビバリーヒルズ・コップ』、支持して下さってウレシイ。最近『友よ、静かに冥れ』『テラ戦士・ボーイ』がなかなかよかったです。『海辺のポーリーヌ』も好きです。相米監督の『台風クラブ』が賞を取ったので、その仕事のための取材をすることになりました。仕事にかこつけて会えるのがとっても幸せです(6月24日)」

「〔4号の〕大木直子さんの文章がかわいかった。たまたま新作映画『バーディ』を見たあとだったので、ほほえましくなってしまうね。映画の方は、あのアラン・パーカーの野心作で、鳥を愛し、鳥になってしまう青年のお話で、それにベトナム戦争後遺症問題がからんでくるという、わりとウルサそうな感動作なのです。ラストシーンが思わずほわっとするほどいいんだけど、そう思ったとたんにそれまでのドラマ展開がうすら寒くなってしまう映画なんですよ。見てない人にいうのは申し訳ないんですけど。そんなせいもあって、大木さんが「すごく、くだらなくてゴメンなさい」と恥じらうところが気に入ったのかな。なんかわけわかんないこといってるようだけど、わかるよね。クモ博士、重島先生のお話はステキですね。先生のお人柄がとてまっとうに伝わってきます。卒業生のお便り、なんかグングン育っている感じがして、重畳感いっぱいですね。いやあ、池田先生もタイヘンだなあ。私は先生にも保母さんにもなれないということが、よくわかります。さ、がんばって仕事しよ。お互い、夏まけしないように気をつけましょう(7月16日)」〔LUCYには6月28日の“GYAさんの花嫁を見る会”でお会いして、二次会の場所までの散歩の間、『友よ、静かに冥れ』の素晴らしさを語り合うことができました。今年はLUCYに教えていただいた映画がとても面白くて、先日でも市川市であったクモのゼミの構りに有楽町スバル座へ『海辺のポーリーヌ』を見に寄りました。キネマ旬報に黒田邦雄さんの否定的な批評(イヤな人間ばかり出てくるし、言葉が過剰である)が出ていましたが、次のようなロメールの言葉が気になって、黒田さんの評価に同感できませんでした。“15年間のフランス映画の流れを2、3語で言いつくすことなど不

可能であり、自分がその流れのなかにありながら、局外者のように判定をくだすことなどできこない。ただ、(ヌーヴェル・バーグ)が作家主義の映画を第一義に認めさせた功績だけは認めていいのではないかと思うのです。その結果、シナリオの内容も野心的になり、観客の方も知的になった。これはわたしの好みにもなりますが、新しい映像時代に真に興味をそそるのは、ゴダール、ジャック・リヴェット、ジョン・カサヴェテスの映画です——それは、映像以上に、言葉の映画だから”(山田宏一『友よ映画よ』話の特集社の238頁)。登場人物はイヤな人間たちというよりも、状況を突破しようと思いつつも、うまく突破できずにあがき、傷つけあってしまう人間たちである。ピエールという少し年がいった青年の状況に感情移入して見てしまった。彼はポーリーヌの従姉に昔から惚れている。思いもかけない再会の後、彼は勇気を出して、愛を告白する。ところが、従姉の方はそんな彼の保護者っぽい愛情がウルサくて、受け入れずに、かえって火遊び的な恋愛に深入りしていつてしまう。この辺りのふたりの、頭ではわかっているのだけれどもどうにもならない感じがよくわかるのである。「愛のかたち」にこだわる作家の視線を感じる)。

武「山北の桜まつりは“13日”と新聞に出ている。200本の桜並木が...というが、200本もあるとは思えない。枝ぶりも若々しさに欠けている。桜の下を通る、例年思うことは“こんなにつぼみが赤くなって、もうすぐだ。もうすぐ”と花あかりを楽しむこともある。しかし、今年は、花にまとまりがない。そうみえるのとなぜだろう。ソメイヨシノに比べて山ざくらはみごとなものだった。「東風」は毎回楽しさを増して次号はなんだろうと期待しています。昨年度は一葉にあけくれ、井上ひさしを電車本とし、幸田弘子さんと新聞の中の笑顔で対面した。水泳部に入ったので、練習はきつかったが、いろいろな友だちができたように思う。波・風・花・嵐とまあいろいろあったが、楽しい一年間だったように思う。将来の不安はまだまだといったところだが、あせるとろくなことはないし承知しているからだいじょうぶ。結婚願望症の友だちが羨ましくもあり、悲しくもある(4月9日)」。

山内「先日、友人が『ガープの世界』と『ハリーの災難』のレンタル・ビデオを貸してくれて、2本とも見た。家で映画を見るというのは土台まちがっている。次から次へと人が来て、電話がかかって、ひとつの流れとしての生命など消し飛んだ。だから『ガープの世界』では、男性社会の静かな否定と、『ハリーの災難』では、死体をめぐる童話の如きユーモアを、全然たのしむことができなかった。家で映画を見ようと思ってはいけな——なる教訓。よい季節になりました。今日も昨日に続いて20度をこすポカポカ陽気。ガープに負けず、洗濯とそうじに午前中は励みました。これから仕事です。Solong(4月9日)」(香川県より。山内さんは上京されて、黒田邦雄さんの個展やアルトマンの『三人の女』を見たそうです。黒田さんの個展ではLUCYとばったり会ったとか。LUCYは体調が悪いのにもかかわらず、夕方になると飲み屋の前を素通りできない気のする毎日の由。)

「第4号とお便りありがとうございました。日録の中で一番印象的だったのは、大木直子さんのことばづかいでした。こういう遠慮のないというか、屁屁のないというか、自由なもの言いを目にすると、思えば私も遠くへ来たものだ、隔たりの大きな差を感じずにはおれません。それは比較的文章力がすぐれている門田優子さんについても感じます。『裸者と死者』を端的に紹介していて、実に適切な文章だなど思っていたら、最後に“なおこれは読書感想文ではありません、念のため”とある。ガクッときた。何故、読書感想文の有無にこだわるのか、私には全くわからない。もしこの一文が読書感想文と限定されると、彼女のプライドが傷つくともいえるのだろうか。わからない。今回はこのお二人の、私にとっての落差が妙に後まで残りました。さて、シネマコラムの送ります。暑い中、お体を大切に。私はひまを見つけてはプール通いをして泳いでいます(7月23日)」[文章を書くときに構えてしまう姿勢というのはなかなか超え難いところがあります。読み手を意識しすぎると大変窮屈になってしまいます。若いときには特に良くも悪くも、コンプレックスがないまぜになっていますし。教育しにくいところだと思います。意識して教育しているつもりもありませんが、山内さんのシネマコラム⑦は『ビバリーヒルズ・コップ』『日曜日が待ち遠しい!』にふれて“管理社会の中において管理されないための”「健康な方法」と「病むな方法」を論じている好論文です。“エディ・マーフィはトム・ソーヤーだ”というのは山内さん独自の視点ではないでしょうか)。

藤田 「ピッコロフューメのパンフレットありがとう。それからいつも送ってもらうミニコミも。なにしろせまい家だから、いろんな資料みたいなものも、あちこちにしまいこんだままになって、もったいないような気がするけど、仕方がない。きちんと整理はしていないけど、ミニコミは手紙のつもりで読ませてもらってます。〔中略。ピッコロフューメのパンフの〕 葛城カメラマンのインタビューのなかで「NGなし」というのは、「ああ、やっぱり」というかんじだった。この前、NHK教育TVに宮崎駿が出て、面白い映画が年に2、3本、面白い本が2、3冊...それだけあれば十分だし、そのほうがいい、といっていて、まったくその通りで、くだらないものやバカなものが多すぎるから、年中、腹を立ててなきゃならない。ミニコミのなかの、YOTAの子供の話が楽しかった。センベエさんじゃなくてハカセだとかね、ちゃんと見るものだ。もうずいぶん大きくなったんだね。よその子は知らないうちにどんどん大きくなるね。(5月23日)」。〔ピッコロフューメのパンフというのは京都の佐々木昭一郎作品上映会の資料である〕。

平田 「オガタコーアンのことは、司馬さんの『花神』にもよく出てきて、この中で大村益次郎と福尺諭吉がひたすら、対立したりするんですヨネ。オガタのやってた道塾つうのは、ここから、たくさんの蘭学者が出てくるネ。司馬さんの松本良順のドラマ、『胡蝶の夢』、あれも読むつもりなんだけどサ。いやはや、とにかく幕末はおもしろいわ！（7月3日）」。

映画『友よ、静かに異れ』は素晴らしい 池田 博明

冒頭ロング・ショット、一台の自動車が道路を走ってくる。反対車線は自衛隊の車の列が続く。この最初のシーンで感じられる批評精神は全編継続していった。アルトマンに『ロング・グッドバイ』という傑作がある。チャンドラーの名作『長いお別れ』の映画化である。エリオット・グールド扮するマーロウは、イメージが合うとか、合わないとか、賛否両論が起こつたらしい。僕は、テレビで見たのだが、常にカメラはゆっくりとパンしていて（ズームのときもあつたかもしれないが）、それがマーロウが人間関係の中を漂う不安定さを表現していたのが見事だった。『友よ、静かに異れ』の最初を見て、みんなで『ロング・グッドバイ』をやるようしているのではないかと誤解した。藤竜也の車が回りこんで停まる。くたびれた感じで藤竜也が下りてくる。店に入る。「フリーイン」はどっちと聞いても、店の者は、それがまがまがしい言葉であるかのように、敵意を見せて答えない。飲物を買おうとするのだが、それにさえ答えない。彼はまったくの「ストレンジャー」なのだ。いつだって、「よそ者」は災いを持ちこむ。乾いた土地に砂ぼこりがあがり、男が汗を目にしみこませて、目を細めるのを見るだけで、来るべきところでないところに来てしまったという、いわば疎外感が現れてくる。ふと『ローリングサンダー』を思う。見知らぬ土地に復讐に乗り込んでいく男たちの伊達と、地元民とのギャップを。「フリーイン」でも男はうさんくさいよそ者としての出迎えを受ける。壊れた部屋、傾くベッド。それでも男は黙っている。多満里の街で男が動き始めると、『ロング・グッドバイ』のようなスムーズなパンは目立たなくなってしまう。大きなアクションはほとんどないのに、緊張感がある。藤竜也に夜の街で大組織のチンピラがまとわりつく。藤竜也が「やくざが人に説教するようになったらおしまいだぜ」と言う。激昂した一人が殴りかかる。それを腕で受けて、腹に一発パンチを入れる。スーッと息を吐く。あつという間である。『野良猫ロック・セックスハンター』の藤竜也について、10年以上も前に弟が言っていた言葉を思い出す。「最後のところで、藤竜也が窓から離れて床から銃を取り出す。あのときの身のこなし、あんな最高のアクションが出来るのは藤竜也しかいない」。

友人の少年が車の中でレモンを拒否するところがある。男がいわば伊達で出したレモンを「レモンはきらいだ」と言って。そこも新鮮なショックだった。レモンは組織と繋がりのある警官によっても拒否される。警官は藤竜也に「お前みたいな奴が大嫌いなんだ」と言って、渡されたレモンを警察内の畳に投げつける。そのレモンを最後に少年が受け入れてしまうのが、残念だ。少年がレモンをガリッとかじるのがラスト・ショットだ。頭ではレモンをかじることが、臆病だった少年の自己克服、自立の決意を表しているのだという意味が分かるのだが、理にはまりすぎた感じがある。それまで映画のシーンの中でレモンが果たしていた役割と合わない。少年は父親の最期を見つけたことで、もう自己克服できたと思うのだ。どうやって落ちをつけるのだと言われても、分からないのだが、藤竜也と原田芳雄の殴り合いのスローモーションも見せ過ぎと感じたが、撮影の浜田毅と主演の倍賞美津子が森崎さんの『党宣言』に続いて素晴らしい作品を見せてくれた事が嬉しい。